

# 温泉地域研究

第7号

2006年 9月

## 論文

- 温泉教授本のパッチワーク的温泉言説と湯治“文化論”の陥穽  
..... 石川理夫 (1)

## 研究ノート

- 塩原温泉郷の健康観光地としての可能性  
..... 前田 勇・姜 淑瑛 (15)
- 鎌倉市における温泉地の地域的変遷 ..... 進藤和子 (21)

## シンポジウム

- 温泉と健康のための地域づくり ..... (27)

## 資料

- 鉄輪温泉の再開発と「むし湯」 ..... 河野忠之・中山昭則 (43)
- スイスの温泉保養施設アルペンテルメ ..... 池永正人 (45)

## 書評

- 石川理夫著：『温泉巡礼』 ..... 長島秀行 (47)
- 山村順次著：『温泉地研究論文集』 ..... 浦 達雄 (48)

- 学会記事 ..... (49)

日本温泉地域学会

# 温泉教授本のパッチワーク的温泉言説と湯治“文化論”の陥穽

## The Pitfall Professor Matsuda's Patchy Remarks on Onsen (Hot Springs) and Hot Spring Cure Culturism

石川理夫\*  
Michio Ishikawa

キーワード：温泉教授 (professor of hot springs)・別府湯けむりニセモノ論 (allegations of fake steam in Beppu)・DNA刷り込み (DNA imprinting)・心の湯浴み (spiritual bathing)

### 1 はじめに

いま日本の温泉界で、温泉関連本を最も多く量産するのは、松田忠徳札幌国際大学観光学部教授（以下、松田教授）であろう。

いわゆる温泉教授本で、“温泉教授”という巧みなキャッチコピーを造った光文社新書編集部から、2001（平成13）年12月に『温泉教授の温泉ゼミナール』<sup>1)</sup>を出版以降、同編集部だけでも『温泉教授の日本全国温泉ガイド』（2002年6月）、『温泉教授の日本百名湯』（2003年9月）、『これは、温泉ではない』（2004年1月）、『ホンモノの温泉は、ここにある』（2004年10月）と刊行が続いた。

また、2001年9月以来、編集長兼責任執筆者として不定期刊『温泉主義』（くまざさ出版社）を5号まで出している。その間、「ホンモノの…」 「マガイモノ・ニセモノの…」温泉といった類似本を出し、2005年12月刊の『温泉教授の湯治力』（祥伝社新書）など、最近では湯治をテーマの前面に打ち出している。

しかしながら、一般に渾身を込めて毎回書き下ろす執筆作業は、たいへん厳しい。それが多きときは1年に数冊本を出すには、世の通例では方法は2つしか考えられない。

1つは、助手やゴーストライターを使い、同一パターンで量産する。もう1つは、学者

でベストセラー作家の養老孟司や日野原重明が語るように、編集者が聞き取ってまとめたものに本人が手を加えて本にする。

そうでなければ、ある結果をもたらしかねない。すなわち、いつも同じ内容の焼き直しになるか、あるいは資料の羅列、果ては他人の著作流用を含めた切り貼り、すなわちパッチワーク的構造に陥る。本稿では、この構造についても詳述する。

松田教授のホームページによると、「専門は温泉文化論」で「日本で初の温泉学教授」にして「現在も日本唯一の温泉学教授」とある<sup>2)</sup>。続けて、「自分が生み出した言葉」と主張する温泉用語を列挙している。

世に自分で「日本唯一」と名乗る人がいたのには驚くが、学者としての客観的評価は、自らの考察の根拠とする資料・出典はもとより、同趣旨内容で先行する他者の論述も明らかにした上での、あくまでオリジナルな論考・研究の蓄積をもってしかない。松田教授は1999年4月に大学教授職を得て7年以上経つが、温泉に関する学術論文は一つも見受けない。

ところで、学界ではなく温泉業界で“温泉教授”を際立たせてきたのは、出版物や雑誌等の連載、講演等の多さだけではない。ホームページ等のプロフィールには、「全国の温

\* 温泉評論家 (critic of hot springs)

泉地再生の指導に当たっている」<sup>3)</sup>とあり、いま松田教授は各地の温泉地に「源泉かけ流し宣言」を奨励して回っている。

さらに、『温泉主義』発行元と提携して日本温泉総合研究所という組織の所長となって、「ORP（酸化還元電位）分析測定認定施設」づくりを行っている。また、「御名湯温泉」<sup>4)</sup>という温泉宿の組織化をはかり、それを「松田忠徳勅撰湯宿集」<sup>5)</sup>にまとめている。しかし、勅撰湯宿とは「天子（天皇）自ら選ぶ湯宿」のこと。松田教授は自らを（温泉界の）天皇に寓しているのであろうか。

松田教授は「日本の温泉文化をリードする温泉宿の集い、御名湯温泉をこれからの日本温泉会議の中核メンバー」<sup>6)</sup>にするという。日本温泉会議は、「日本の温泉文化の継承や発展など多彩な活動を展開していく」<sup>7)</sup>予定の組織とされる。

こうした活動は、温泉地関係者、温泉地域づくりに携わる者、温泉文化論研究者なら大きな関心事であろう。そこで、温泉教授本を通じたさまざまな温泉言説と湯治“文化論”を検証し、構造的な問題を考察することが、本稿の目的である。

## 2 温泉に関する初歩的理解

### (1) 温泉法を知らない温泉教授

2002（平成14）年9月刊の『温泉主義』第3号では、松田編集長自筆の小文「鉱泉と温泉の狭間で」の冒頭で、「温泉法では、温泉は泉温によって、冷鉱泉、微温泉、温泉、高温泉に分類されている」<sup>8)</sup>と記している。続いて「（宇田川）榕菴を前にかすむ温泉法」の概念」という小見出しの一文でも、「温泉法の下では温泉が鉱泉に取って代わり、表3のように泉温によって、冷鉱泉・微温泉・温泉・高温泉に分類されることになった」<sup>9)</sup>と誤解を重ねている。その表3には、「温泉法による温泉の分類 高温泉…42度以上 温泉…34度以上、42度未満 微温泉…25度以上、34度未満 冷鉱泉…25度未満」<sup>10)</sup>と

記している。そして本来この表題なら、鉱泉分析法指針への言及が不可欠なのに一切ふれていない。

言うまでもなく、温泉法には泉質を含む温泉の分類など記されていない。記しているのは鉱泉分析法指針である。温泉法も鉱泉分析法指針もまともに読んでいないようである。

今でも松田教授はホームページ掲載「温泉学 温泉の分類」に、「温泉法は昭和46年の第三次改正で、それまでの17種類の分類から11種に統合され、昭和54年の改正ではさらに9種類に統合され」<sup>11)</sup>と間違った説明を続ける。2004（平成16）年1月刊『これは、温泉ではない』でも、「実は1958年に日本で温泉法ができる以前は…」 「日本では、温泉法ができた1958年にその（＝温泉の、筆者注）概念に変更が加えられた」<sup>12)</sup>と、1948年が正しい年にもかかわらず、繰り返し間違えている。

さらに同書は、温泉法の立法にかかわる認識として、「本来温泉は必ず鉱物質を含んでいるものを指していた」「本来の考え方に立ったなら二十五度以上あれば温泉などとはいえない。これを温泉と言いくるめたところに、今日の循環風呂乱立の事態に至る発端がある」<sup>13)</sup>と記す。これは根本的な誤りである。

温泉法と鉱泉分析法指針の背景には、温泉概念を包括する鉱泉概念があったが、温泉概念を包括する鉱泉の真の意義は、温泉法の基礎となった1911（明治44）年のナウハイム決議にあるとおり、「地中から湧出する水で、特別な化学成分組成や物理的特性から医学的治療効果をもたらす可能性があるものを鉱泉と呼び、ふつうの水（常水）と区別する」<sup>14)</sup>ところにある。

松田教授の「本来温泉は必ず鉱物質を含んでいるものを指していた」は、化学的成分組成という一面しか見ていない。その土地の年間平均気温より常に著しく高い泉温を保って湧出する水も、特別な物理的特性を持つとみなされ、何らかの医学的治療効果を期待され

たのである。

年平均気温の低いヨーロッパ諸国は温泉と規定する泉温を「摂氏 20 度以上」としたのに対して、年平均気温の高い日本では温泉法で「摂氏 25 度以上」と定めたのは、本来の自然湧出泉においては意味があった。大深度掘削によって 25 度以上のただの温水並みの「温泉」が簡単に得られるようになり、温泉法の泉温規定がそぐわなくなった現実と、立法の背景にある温泉・鉱泉の本質を混同してはならない。温泉の本質や温泉法をよくわかっていない人が、2004（平成 16）年夏の温泉騒動で「温泉法の専門家」を名乗るのは奇妙である。

## （2）レジオネラ属菌の理解

温泉教授本デビュー作『温泉教授の温泉ゼミナール』（以下、『温泉ゼミナール』）と翌 2002（平成 14）年 11 月出版の『温泉力』（集英社インターナショナル）は、松田教授温泉言説の内容や構造を推し量る格好のセット材料となる。

このとき、松田教授はレジオネラ属菌への基本的理解も定まっていなかった。『温泉力』で、「レジオネラ菌はチフスやコレラ菌と同じ仲間である。急激に免疫システムを破壊する」<sup>15)</sup>と繰り返して記している。土ぼこりや淡水中など、ごく身近な自然界にいるレジオネラ属菌も、動植物に棲みつく細菌の大半が属するグラム陰性桿菌に含まれる。「猛毒のサルモネラ菌やチフス菌、ペスト菌」<sup>16)</sup>らも広くグラム陰性桿菌に分類されるだけで、そう記述するのは恐怖をあおる意味しかない。

レジオネラ属菌は人から人へ感染しない。「免疫系を破壊する」とはとんでもない話で、抵抗力が弱い高齢者などがレジオネラ属菌が大量に繁殖した湯水を吸い込んだりすると、自然治癒型のポンティアック熱か、ときに急性肺炎に似た細菌感染症を起こすのである。それを伝染病原菌のチフス、コレラ菌などと同一視して恐怖をあおり、循環風呂をたたく

エキセントリックで非科学的な言説は、塩素剤・殺菌剤をもっと使用せよと言うに等しい。

## （3）塩素剤の認識

これは、塩素剤の記述においても当てはまる。『温泉ゼミナール』は、「塩素には発ガン性物質トリハロメタンが含まれていることは周知の事実である」<sup>17)</sup>と繰り返して記す。発ガン性等の有害性が疑われるトリハロメタン（有機ハロゲン化合物）は、塩素には含まれていない。水中に含まれる有機物の量が多いと、互いに反応して生成され得るものである。先の記述の後、「私のような温泉学の専門家が、温泉離れを起こしかねないこうした事実を報告せざるを得ないのは正直いって辛い」と述べているが、いったい何を言いたいのであろうか。

さらに、「塩素が皮膚を溶かしている場合もあります」「肌がつるつるになったと喜んで、実は塩素で肌が溶けただけということもある」という記述も目立つ<sup>18)</sup>。浴槽に多めに投入された塩素剤程度で「肌が溶ける」とは、いかなる化学知識の持ち主なのであるうか。重曹泉などのアルカリ性泉では、石けん効果で古い角質（垢）や脂分が落ちやすくなる美肌作用とは別次元の誤りで、塩素剤問題での行政当局への説得力を減じてしまったのである。

## （4）松田教授の温泉「造語」

松田教授は 2005（平成 17）年 6 月刊『温泉主義』第 4 号に、「循環風呂は私の造語で、現在では市民権が得られたとっていい」「かけ流し、源泉かけ流しも私の造語」<sup>19)</sup>と記している。

今もホームページのプロフィール欄には、「循環風呂」「塩素殺菌風呂」「源泉 100% かけ流し」「ホンモノ（本物）の温泉」「マガイモノの温泉」「温泉力」などの「言葉を生み出し、市民権を得る」と記している<sup>20)</sup>。

まず、「循環風呂」「塩素殺菌風呂」については、循環湯、すなわち循環ろ過方式を採用した浴槽（風呂）は、高度成長時代から数も

規模も拡大する浴槽の衛生管理と湯量不足解消を目的に、塩素剤を主にした殺菌・除菌処理を伴って導入されたもので、正しくは循環湯、循環ろ過浴槽と呼ばれて久しい。その行政・業界用語の言い換えの1つにすぎない。しかも、循環風呂より循環湯のほうが湯を循環させているという核心を表現している。塩素殺菌処理をした浴槽を塩素殺菌風呂と呼びたいのであろうが、単なる言い換えを「私の造語」と言い張ること自体、彼の体質にそもそも問題があるのではないだろうか。

松田教授が循環湯や塩素殺菌に初めてふれたのは、1998（平成10）年4月から旅行作家として「列島縦断2500湯」巡りレポートを日本経済新聞に連載<sup>21</sup>し始めてからである。拙著を例にとっても、当然それ以前より、ろ過循環については1994（平成6）年刊の『おふろの楽園』<sup>22</sup>で指摘しているし、1999年刊の『湯治で元気になる』では用語解説の中に循環湯も入れている<sup>23</sup>。

次に、「かけ流し」「源泉（100%）かけ流し」についてみよう。「源泉」は、そもそも法律<sup>24</sup>かつ行政用語である。法社会学では、温泉権をめぐる川島武宣が厳密に定義づけしてきた<sup>25</sup>。「掛（か）け流し」は古い用語で、温泉業界でも使われてきた。それを知らなかっただけのことである。松田教授が『北海道とおきの温泉』などを書いていた1980年代後半、それらの用語は松田本に表れもしないが、すでにどちらも辞典にすら載っていた<sup>26</sup>用語である。

松田教授の著述に「源泉」という用語が登場するのは、先の日経新聞連載1998年8月9日付が初出である。それまでは、「原水（温泉）を水で薄めず…」<sup>27</sup>などという言い回しであった。それより5年前の1993（平成5）年、筆者は拙著『のんびり温泉100湯』の巻頭で、「本書の勧める『ほんものの温泉』の選択基準とは、つぎのとおりである」として、「第一に、源泉を大切に、豊かな源泉を私たちが利用できる温泉。これは温泉の原

点である」と明記していた。

一方、「源泉をかけ流しにする」という表現は、筆者は1999年刊の拙著『湯治で元気になる』<sup>28</sup>以後よく使う。松田教授の場合、2000年3月刊『列島縦断2500湯』、同年11月刊『お湯で選んだ“源泉”の宿』（弘済出版社）にもまだ見当たらない。「浴槽から流しっぱなしの…」という表現に終始していた。

#### (5)「温泉力」という造語の剽窃

続いて「温泉力」について検討する。じつは、この用語は1998年以来3年間雑誌連載した温泉格付ガイド『極上ゆシュラン』誌上で、温泉の実力を6項目の指標から総合評価する言葉として、筆者が造語したものである<sup>29</sup>。

松田教授も最初は借りてきた言葉という自覚を持っていたようで、「温泉力」というように括弧付きで、先の2000年3月刊『列島縦断2500湯』に初めて採り入れた。それも、オリジナル原稿である1998年4月からの日経新聞連載にはなかったのに、後に本にまとめ直す段階でわざわざ「温泉力」と書き換えたのである<sup>30</sup>。

なぜ、他人の造語まで自分の造語にしたいのか。経過を少し検証する。松田教授の先の日経新聞連載は1999年10月3日付で終わり、翌年3月に『列島縦断2500湯』本にまとめるその間、筆者側では前出の雑誌は連載中で、加えて1999年9月に拙著『湯治で元気になる』を出版し、温泉力という自分の言葉を多用した。その少し後の10月、偶然と思うが、『別冊太陽』（平凡社）が「温泉力」というタイトルで出版された。松田教授は、その年11月24日付朝日新聞インタビュー<sup>31</sup>で“温泉力”という言葉を採用し、記事の見出しも括弧付き「日本人支える『温泉力』」とした。

松田教授は、新聞記事でお墨付きを得たように、「温泉力は自分の造語」と公言し始める。すでに、筆者が2002（平成12）年3月、こ

の点を含めて指摘した質問状を送ったにもかかわらず、松田教授は返答せず、その年の11月に何と『温泉力』というタイトルの本を出版した。その中に、「温泉力とは何か」という一章まで設けた。

こうした態度は、造語の対象にならない一般表現の「ホンモノ（本物）の温泉」を「私の造語」と言い張ることにも表れている。これについても、松田教授よりはるか前、前出1993年刊『のんびり温泉100湯』冒頭、「ほんものの温泉」を温泉選びの基準と明示し、2000年8月には拙著『本物の温泉 ここが一番！』（宝島社）も出している上での話である。

### 3 別府鉄輪温泉の湯けむりニセモノ論

前出の『温泉ゼミナール』で、松田教授は別府鉄輪温泉の湯けむりは「大いに怪しく」、「温泉から出るホンモノの湯けむり」ではない<sup>32)</sup>と、プロローグを別府たたきで始めた。

#### (1) 湯けむりとは何か

松田教授は、別府鉄輪の湯けむりは「実は水蒸気」で、「別府は恵まれた地熱地帯だが、温泉掘削をし過ぎたせいか水脈が得られず、温泉水の代わりに蒸気が噴出する」ので、これは「本当の湯けむり」ではない、と言う<sup>33)</sup>。松田教授は草津の湯畑を例に、「温泉から出るホンモノの湯けむりはたかが知れている。10メートルも上がることはない」と述べる<sup>34)</sup>。

湯けむりとは、煙のように立ち上る湯気や水蒸気まじりの噴気をいう。熱気充滿して高温なほど、あるいはやかんやパイプロのように絞り込まれ圧縮されているほど高く上るだけで、また、外気温や天候によっても湯けむりの高低や範囲は変わり、湯けむりの高低でホンモノ・ニセモノに分かれるわけではない。

草津湯畑から自然湧出する泉温は約55度程度なのに対して、別府鉄輪一帯は地熱が高い、いわゆる地獄地帯で、湧出源泉の泉温は

最高100度と水の沸点近い。市営かなわむしゆでも、地温は75度に達する。鉄輪から明礬温泉一帯を巡れば、軒先のコンクリートや地面に各所でひび割れが生じ、そこから噴出しているのがわかる。高温地熱地帯では、地面にパイプをさして噴気を安全のために地上高く抜かなければならない。これと地獄から立ち上るものや名物地獄蒸しの噴気などを合わせたものが、鉄輪の湯煙の主力である。

松田教授は、近年の温泉掘削のせいで「温泉水の代わりに」「ニセモノの湯けむり」蒸気が噴出するようになった、と述べているが、歴史認識から間違っている。江戸時代の1694（元禄7）年に別府を視察した貝原益軒が著した『豊国紀行』にも、「地中に温泉の出る所、其熱気有て、地上に熱気をふきあぐ」と記されているのである。

#### (2) 水蒸気・噴気は火山性温泉のエキス

別府の自然の湯煙自体をまるごとニセモノ呼ばわりした上に、松田教授は、「驚くのはまだ早い。実は別府ではこうした蒸気に水道の水を当てて温泉を製造している」「それって、温泉といえるの？」<sup>35)</sup>と記す。要するに、別府鉄輪の湯けむりは温泉水を造成している蒸気だからけしからん、というのが本音であろう。

湯けむりの主体は、すでに述べたとおりであるが、別府鉄輪のみならず、霧島温泉郷、大涌谷・小涌谷・湯ノ花沢等箱根温泉郷、宮城県鬼首温泉郷、秋田八幡平蒸ノ湯温泉など、水蒸気や火山ガスまじりの噴気地帯は、温泉の産みの母たる活発な火山活動を如実に示す、わが国を代表する貴重な泉源地帯である。高温水蒸気・噴気が利用されているのは、こうした温泉資源の宝庫に集中している<sup>36)</sup>。

松田教授は「温泉水」と「蒸気・噴気」を対置させるが、火山地帯の噴気ガスの一般的な組成では9割以上、ほとんどが水分（H<sub>2</sub>O）であり、そこには温泉成分が濃縮されている。

自然界では、地下でいつも水に恵まれて温泉成分がほどよく加水希釈され、世間でイ

メージされる「温泉水」の出来上がりとはばかり、地上にうまく湧出してくるとはかぎらない。そう思いこむのは、人間の身勝手である。

謙虚な先人たちは、温泉成分が濃縮された高温の水蒸気・噴気を何とか活用し、入浴利用に供せないかと思案を重ねてきた。明治期半ばに出版された『箱根温泉誌』は、箱根小涌谷について以下のように記している。

「小地獄とて一円の硫黄山あり、温泉此処より湧き出づれども熱度甚だしく、且つほとぼしり出づること少きを以て、浴場を設け難く（中略）別に山間の溪水を引きて泉上に灌ぎ、竹管を以て其の冷和清澄せるものを遥かの山下に引き、此処に浴場を設くるに至れるなり」。

こうして早くより、正確には温泉水造成に取り組んできた歴史を直視すべきであろう。温泉にとっての水分確保の機会は、天水、地下水を主に地球の大きな水循環に左右される。地下でたまたま水に恵まれて適温の温泉水になったものだけを「ホンモノ」と呼び、火山活動で温泉成分を濃縮させ、噴気地帯から沸騰圧縮されて水蒸気状態で噴出するものに人が水を足して入浴利用できるようにしたものを「ニセモノ」と呼ぶのは、温泉の成り立ち、温泉史への無理解を示すものではないか。

明治以降、温泉造成を始めた箱根大涌谷でも、雨が降れば噴気水蒸気と混じって酸性を帯び硫酸塩を含む自然の湯の川ができる。これこそ極上野天風呂であろう。箱根湯ノ花沢の噴気地帯にも、以前は入浴用の小屋があった。しかし、火山性ガス事故を伴うため、水蒸気噴気の間接利用に切り替えた歴史がある。

あるいは群馬県尻焼温泉、和歌山県川湯温泉などの有名な「川湯」で知られるように川の中から、また北海道の水無海浜温泉や屈斜路湖畔の温泉群のように海中・湖中から自然に湧き出る高温源泉は、川水や海水・湖水とまじって初めて人が利用できる状態となる。

こうした極上温泉も、松田教授にとってはマガイモノとなる。

温泉資源の多様性を前に、人も動物もせいぜい40数度までのわずかな適温幅でしかそのままでは入浴利用できない弱い存在である。いくら新鮮濃密な温泉蒸気が噴出している、直接浴びたり吸入するわけにはいかない。熱交換装置がない時代には、高温泉は長時間放置して鮮度と引き換えに自然冷却するか、冷却加水せざるを得なかった。松田教授は、とにかく加水を嫌悪するが、場合によりけりで、成分を多く含む源泉は、その程度で薄まって持ち味が変化するほど柔なものではない。

### (3) 濃縮温泉推薦のダブルスタンダード

したがって、鉱泉の定義とは別に、温泉法では温泉の定義に、地中からゆう出する「水蒸気その他のガス（炭化水素を主成分とする天然ガスを除く）」を加えたのは、温泉利用の歴史をふまえていたからである。

先の温泉資源の豊かさを秘めた自然の噴気地帯における温泉水造成史は、市販の人工温泉とはまったく異なるものである。しかし、松田教授が所長を務める日本温泉総合温泉研究所の主な業務内容に、新しく「5 人工炭酸泉、電解還元温浴など人工温泉の研究・開発・普及業務」を加えたのはなぜか。人工温泉のマガイモノぶりでも研究するためなのであろうか。

「松田教授忠徳教授も絶賛！濃縮温泉 源泉100%を天然成分を変えずに特許製法で濃縮したものです」とは、温泉教授の提携企業のうたい文句である。ここに至って、松田教授の身上とする「源泉100%」も底が知れる。要は新手の入浴剤を宣伝・販売するものではないか<sup>37)</sup>。「濃縮温泉で心身の元気を」と題した松田教授の推薦文には、「月に何度も温泉に通うお金も暇も持ち合わせていないわれわれの前に信じられない温泉が誕生した」「サンキョーの濃縮温泉は人工温泉ではなく、天然温泉からその成分を濃縮したスグレモノで

ある、入浴後の肌のしっとり感と保温効果は本来の温泉と大差がなく、正直言って驚いた<sup>38)</sup>とある。入浴剤混入に端を発した人工温泉騒動における松田教授の非難は、己に突き刺さってしまうであろう。

#### 4 湯治“文化”論考

湯治ブームに刺激を受けてか、松田教授の最近のテーマは湯治だという。しかし、湯治に関する初の言及は、2000年11月刊『全国お湯で選んだ“源泉”の宿』(弘済出版社)のコラム「湯治場こそ日本の温泉の原点」と、遅かった。それから最近刊『温泉教授の湯治力』や、湯治をテーマに文献を並べ立てて、「日本温泉史」に仕立てたい雑誌連載『日本温泉物語』(旅行読売)、同種内容の『江戸温泉物語』(週刊新潮)に至るまで、松田教授の湯治“文化”論は、要するに同じ心情を繰り返して述べているにすぎない。

##### (1) 湯治文化は日本人だけ論

その中味は、以下の記述に尽きる。「このような習慣(=湯治、筆者注)をもった国はほかに考えもつかない。要するに湯治は、日本人のアイデンティティに深く根ざしていた」「温泉文化は日本人のアイデンティティそのもの」「温泉は(湯治を好んできた)日本人のDNAに刷り込まれている」<sup>39)</sup>といい、以下に、「日本人は心の湯浴みをするために温泉に入る」「日本人にとって温泉は心を洗う場所だが、欧米人はからだを洗う」「欧米の“洗う”文化に対して、日本の“浸かる”という特有の文化は湯治と無縁ではなかった」<sup>40)</sup>などというものである。

『温泉教授の湯治力』では、温泉が文献に現れる奈良時代から「1300年に及ぶ温泉=湯治との関わり」の「記憶が日本人のDNAの中に連綿と引き継がれ」<sup>41)</sup>てきたと記す。

何も文献に現れたから、親から子へ受け継がれるDNAが突然変異を起こしたり、日本人や欧米人の文化的差異が刷り込まれるはずもない<sup>42)</sup>。文化宗教を含めて、日本人は特

別といった情緒の日本人観に乗り、温泉文化史への視座を歪めた、過てる“温泉・湯治文化”日本特殊論の吐露でしかない。

古今東西、人は心とからだのトータルな面において、温泉から享受するすべてを恵みと受けとめた。本質的な意味において、それは湯治体験であった。新旧大陸を問わずどの土地にあっても、温泉場はすべて心身を癒す湯治場として始まり、共同で育まれてきたことは、拙著『温泉法則』<sup>43)</sup>や『温泉巡礼』<sup>44)</sup>でも繰り返し詳述してきた。

温泉や湯治は、日本人の専売特許ではない。古代ヨーロッパのケルト社会でも(温)泉は聖地とみなされ、聖なる湯治場をめざす(温)泉巡礼の慣習があった。各地の泉源から、盲目の少女木像など治癒を祈願した奉納物が多数発見されている<sup>45)</sup>。(温)泉と湯治場への敬虔な思いは古代ローマ社会へ継承され、「神の造りたまひしそのいで湯」<sup>46)</sup>と温泉を讃えたように、中世キリスト教社会の底流となった、人類普遍的な文化的営為である。

しかも動物が湯だまりに入浴し、温泉泥を皮膚にこすりつけて傷や皮膚の治癒を試みる行動は、あまねく知られている。松田教授流を貫けば、人類はおろか動物のDNAにも温泉や湯治は刷り込まれてしまう<sup>47)</sup>。

##### (2) 「心の湯浴み」の二重誤謬

日本の温泉・湯治文化を世界唯一と思いこむ偏見と誤りは、入浴文化史への誤謬で助長される。それを象徴し、松田教授がDNA同様自己陶醉する常套句が「心の湯浴み」であり、「日本人は温泉に“浸かる”文化で心の湯浴みをする vs 欧米はただ体を“洗う”文化」という二者対置の構図である。

「温泉は単に体の汚れを落とすだけではなく、心を洗うもの、心を清めるものになっていったと思われます。この点が欧米人とは決定的に異なるところでしょう。欧米人はシャワーで体の汚れを落とそうとします。それはあくまで体の表面の汚れを落とすのが目的・・・(中略)・・・それに比べ、日本人は古神道に端



を發する禊ぎの心を持ち、その心をもって温泉に浸かり、精神的な安堵感と満足感を味わって…」<sup>48)</sup>と述べている。

「日本人は、体だけで温泉に入るわけじゃないんですよ。心も一緒に入ってるんです。私はそれを『心の湯浴(あ)み』という言葉で表現しています」<sup>49)</sup>とも記している。

じつは、この当否を論ずる以前に、二者対置の構図のアイデアと表現共に、温泉研究家・八岩まどかの先行する著述そっくりなのである。以下、八岩の該当箇所を示す。

「湯に浸かることを楽しむ文化からは、風呂場とトイレを一緒にするといった発想は生まれない。・・・(中略)・・・ユニットバスはヨーロッパの洗う文化が輸入された結果なのである。・・・(中略)・・・しかし(日本では、筆者注)“湯に浸かる文化”が払拭されることはなかった。心身を清めるという信仰は、体を清潔にするという近代科学の概念に置き換わったものの…」<sup>50)</sup>とある。

洗う行為と湯に浸かり安らぎを得る行為は、対立的に意味付与すべきものではない。個人の日常の連続した行為や、TPOやニーズに応じてどちらかを優先する場合もある。毎日何度も湯に浸かる湯治客は、精神的満足より具体的症状の改善を期待する。したがって、こうした2つの行為に民族的文化的差異を当てはめることは、二重に誤りと言えよう。しかも温泉を含む入浴慣習や温泉への想念は、歴史的にも大きく変遷してきた。日本と西洋という地域・民族差より、歴史的時間的差異や逆に共通性のほうがはるかに目立つのである。

「洗う文化＝欧米」の考え自体おかしい。むしろ、日本こそ古くは蒸し風呂の外で、江戸中期以降の湯に浸かる形式の湯船になった銭湯や温泉でも、ごしごしよく洗いたがるではないか。寒冷乾燥気候のヨーロッパと東アジア・モンスーン気候の湿潤な土地のどちらが、洗う行為の必要性が高まるのか。八岩も先の著述でふれているが、19世紀以降の近

代衛生思想の普及とともに新しい入浴設備を開発し、機能性を追求した新しい入浴文化をリードしたのがたまたま欧米であり、その産物にシャワーやユニットバスも含まれていた。そこに、文化や民族の差異を超えた利便性・機能性を見いだせたために、世界に普及した。しかも、欧米のシャワー設備は温泉地で源泉を効果的に注ぐ湯治療法に応用され、湯治客の心身を癒すことにも貢献してきた。

シャワーを体の汚れだけを落とす設備として、記号化はできない。どんな民族もさまざまに利用する。シャワーを浴びて、マッサージ効果とともに心地よさや「精神的な安堵感と満足感を味わ」える。欧米人だけが体の汚れを落とすのではなく、必要ならだれもがそうする。洗う、浸かるを文化的差異に見立て、温泉利用に当てはめるのはのはずれである。

温泉の恵みを等しく享受する人間の営為を、自分たちは精神的で、あちらはそうではないと、精神性の優劣を競うのは傲慢で、学説ではない。温泉・湯治文化史からは、温泉神を崇め、聖地とみなした古代ヨーロッパや新大陸先住諸族、アイヌの人々などの温泉への敬虔な感情や慈しみ、温泉にすがる泉源浴場に日がなひたすら浸かっていた中世ヨーロッパの湯治場風景が見えてくる。むしろ日本人も同じ敬虔さや風景をかつて共有していたという、逆説こそ浮かび上がってこよう。

### (3) 日本の温泉＝禊ぎの精神論

さらに、一知半解に、禊ぎを(古)神道のみと結びつけ、かつ「禊ぎの精神」なるものを日本人特有とみなしたり、果てはそれを日本固有の温泉文化と決めつけている。水や(温)泉を利用する斎戒沐浴、禊ぎの精神文化は、仏教や古代ヘブライズム(ユダヤ教)に見られ、キリスト教やイスラム教へ引き継がれた。文化的慣習としても、近隣では朝鮮半島<sup>51)</sup>や中国華南地方にも見られる。禊ぎ、斎戒沐浴はあまねく見られる。松田教授は「心の湯浴み」なる無意味な美辞麗句で、自己の温泉文化論の空洞を埋めたがっている。

補足すれば、松田教授は「海外に温泉はある」が、「ヨーロッパでは温泉はもっぱら医療に利用され・・・(中略)・・・科学的な立場に固執したとすれば、日本では身心(原文ママ)を再生させ、自然治癒力を高めることに主眼を置いていた。・・・(中略)・・・こう見てくると、ヨーロッパの温泉と日本の温泉は同じ温泉であっても、似て非なる存在だと分かるでしょう。それは、湯に対する日本人とヨーロッパ人との考え方に大きな相違があるからです」<sup>52)</sup>と述べる。

「ヨーロッパでは、温泉はもっぱら医療に利用され」てきたのなら、ヨーロッパに日本以上の湯治文化があったと認めたことにもなる。日本では、湯治が長く経験則に委ねられ、温泉医学も後発的だったため、「科学的な立場」に支えられなかっただけである。

一方、ヨーロッパで医療保険を適用して温泉地療法を勧めてきたのは、対症療法に限らず環境変化による転地効果を含むトータルな自然治癒力回復を期待してのことであった。医学や科学と「心身の再生」を対立させるのは、カルトである。今では、融合が進む“ホーリスティック”な東洋医学と西洋医学を相も変わらず二極対置させ、日本とヨーロッパの温泉・湯治にはめこもうとし、それで日本の精神的優位性を妄想するのは、間違いのみな

らず、政治世界と似た危うい結果を招く。

温泉は本質的に普遍的で、すべての人を受け容れるアジュール(聖域)<sup>53)</sup>と考えられる。温泉とのかかわりは、何も「湯に浸かる」だけではない。飲泉も吸入法も蒸気浴もある。ときに体を洗う必要があれば、そうすればいい。求める人の裁量に委ねられ、心身のトータルな癒しとリフレッシュ、楽しみから生み出されるのが温泉・湯治文化である。

## 5 温泉言説のパッチワーク構造

すでに、造語や八岩の著述流用の問題からも、許容しがたい松田教授の“盗用”構造が浮かびあがる。塩素殺菌循環湯批判関連のエキセントリックな部分を除き、温泉教授本デビュー作『温泉ゼミナール』を一読して、筆者は、拙著『温泉で、なぜ人は気持ちよくなるのか』と『本物の温泉 ここが一番!』にそっくりの表現、論考アイデアを随所に見だし、驚愕した。それらは、松田教授の著作にこれまでなかった内容ばかりであるのに、突然似た内容で仔細に全面展開されていた。

同書に限らない。後続の著述にも、やはり筆者が温泉文化論として論述してきたと類似論考アイデア、表現が散乱している。ここに誌面の許す限りの範囲で、その一端を対照表に示したのが表1である。

表1 松田本とそれに先行する石川著作論考の類似該当箇所比較対照表(抄)

松田本	石川本
● 2001(平成13)年12月刊の松田忠徳著『温泉教授のゼミナール』より。引用頁順に配列。続いて、2002(平成14)年11月刊の松田『温泉力』と同2002年6月刊『温泉教授・松田忠徳の日本百名湯』からも一部を載せた。	● 2001(平成13)年4月刊の石川理夫著『温泉で、なぜ人は気持ちよくなるのか』(講談社プラスα新書)の該当箇所頁。※印は、さらに先立つ2000年8月刊の同『本物の温泉 ここが一番!』(宝島社)他より。

<p>温泉の湧出する一帯は聖なる場所とされ、温泉は村びとたちの共有物とされた。(中略)共同浴場(外湯)の付近に温泉寺や薬師堂が建てられたのは村の聖域としての証でもあった。本来、温泉とはこのようなものだったのである。(中略)湯元である共同浴場を取り囲むようにして湯宿、商店などが建てられ、温泉街が形成されていった。大雑把だがこれが現在各地にある有名温泉地の基本的な成り立ちである。</p> <p style="text-align: right;">【38頁】</p>	<p>湧泉、温泉そのものが聖地であった。(中略)聖地として共同体すべてに開かれた温泉(中略)で崇めた神殿は、日本であれば、泉源地のかたわらに奉られた温泉神社もしくは温泉寺・薬師堂に通じる。</p> <p style="text-align: right;">【41・42頁】</p> <p>歴史の古い温泉地はすべて、新鮮な源泉が自然に湧出する場所から始まり、基本的には今日まで至っている。</p> <p style="text-align: right;">【55頁】</p> <p>源泉にこしらえた湯坪が屋根つきの建物に収まり、立派になった共同浴場を囲むように広場ができ、(中略)</p> <p style="text-align: right;">【230頁】</p>
<p>昨年掘削によって雨後のタケノコのように誕生している公共温泉(中略)はもともと素質の無かった土地に科学技術の力をもって、いわばむりやりに温泉を引き出したのであるから、どうしても“温泉力”がない場合が多い。温泉の質のことである。(中略)もともと温泉の素質のなかった土地に温泉施設をつくらうとするのだから相当に無理がある。</p> <p style="text-align: right;">【38-39頁】</p>	<p>無理もない。地上に現れる必然性もなく、地下深くたまっていた、ただの温水である。(中略)地上への道筋も得てホンモノの温泉になっていく前の、荒削りの温水だ。</p> <p style="text-align: right;">【139頁】</p> <p>※ 温泉需要やビジネス拡大や公共事業をあて込み、深くボーリングして動力でそのまま汲み上げられた温水は、熟成もしていないのに無理やり引っぱり出されたようなもの。</p> <p style="text-align: right;">【『本物の温泉ここが一番!』67頁】</p>
<p>掘削技術の著しい進歩で、最近は一五〇〇-三〇〇〇メートルの深層水を掘り当てるケースが多くなった。どうもこうした深層部から汲み上げた温泉には共通点がありそうだ。泉質にアルカリ性単純温泉が目立つのである。だが、アルカリ性といっても、われわれが肌の感触で知っているあの独特の湯のやわらかさとは少し違うようだ。熟成する前の硬質の湯なのである。原因は、深層部で眠っていたただの温かい水であったために違いない。二〇〇〇メートル近くも掘削されなかったなら、地下で眠ったまま温泉といわれることもなかった液体なのである。</p> <p style="text-align: right;">【41-42頁】</p>	<p>近年千数百メートルも深くボーリングして温泉を得た場所の、泉質表示を見ると、ある種の傾向に気づく。「アルカリ性単純温泉」が増えたことだ。(中略)泉質が、なぜか単調になっている。それは見た目や感触でもわかる。温泉水からは湯の香が漂わず、より無色透明無味無臭さを増している。泉質上は同じといっても、従来の地下浅いところから湧出するアルカリ性単純温泉の持つ、すべすべした肌ざわりのよさ、湯の軟らかさも失われている。肌にチカッとして、なんとも感触がさら湯に近い。無理もない。地上に現れる必然性もなく、地下深くたまっていた、ただの温水である。</p> <p style="text-align: right;">【139頁】</p>
<p>公共温泉ブームの火付けは、故竹下登元首相の有名な「ふるさと創生資金」であった。温泉のなかった自治体が、創生資金を使ってダメモトの気持ちで温泉を掘ったのである。すると出るわ出るわ、(中略)人工衛星を使った探査技術の進歩もあって日本中掘れば外れることの方が珍しいのである。</p> <p style="text-align: right;">【48頁】</p>	<p>日帰り温泉施設(中略)には竹下内閣のふるさと創生予算が大いにプッシュしたことは周知のとおり。近年の温泉掘り当ては、(中略)各種センサーで空中探査、解析し、掘削技術の進展と相まって、自治体が掘り当てた温泉は八四%と驚異的な成功率を誇る。</p> <p style="text-align: right;">【134頁】</p>
<p>温泉は「生きもの」である。(中略)経過するにつれて温泉は劣化する。温泉は生きものだから鮮度が命なのである。</p> <p style="text-align: right;">【64頁】</p> <p>温泉もれっきとした「生き物」だからである。繰り返しになるが、ジョッキにつがれた生ビールを想像して(中略)</p> <p style="text-align: right;">【77頁】</p> <p>【付記】松田はこのときだけ、老化と言わず、劣化という言葉に代えている。</p>	<p>人も温泉も等しく、(中略)生き物だから、共鳴し合うのである。まるで生き物のような温泉とつき合いを深めると、よき友みたいに、じわっといい影響を与えてくれる。</p> <p style="text-align: right;">【90頁】</p> <p>温泉も老化する。鮮度が命。(中略)いわば地下深くじっくり寝かされて熟成するワイン・酒と同じ。</p> <p style="text-align: right;">【『本物の温泉ここが一番!』はじめに】</p> <p>※ 温泉も生き物であり、老化する。</p> <p style="text-align: right;">【1999年8月刊『湯治で元気になる』はじめに】</p>

<p>循環風呂は浴槽の縁から湯があふれていないのが特長である。(中略) 循環風呂の見分け方はいくつかある。簡単なのは湯が浴槽からあふれているか否かを見ること(中略) 循環風呂、半循環風呂の場合は浴槽の内側に湯の取り出し口が付いているので分かる。(中略) お尻を当てると吸い込まれる 【64-65頁】</p> <p>さらにチェックするならば、浴槽壁面にある排出口だ。壁面にあるのは循環槽へ湯を送る排出口である。 【122頁】</p> <p>【付記】 松田が初めて循環湯の見分け方に言及した箇所。</p>	<p>※循環湯の見分け方のポイント図解</p> <p>① 湯口から一見新鮮な湯がざざざあ注がれているが…</p> <p>② 湯船のふちからは全然外にあふれ出ない(中略)</p> <p>④ 浴槽に足元が吸いこまれるような排出口がある</p> <p>⑤ 浴槽壁面に湯の排出口か注湯口がある</p> <p>【『本物の温泉ここが一番!』71頁】</p> <p>この場合、見た目には湯が浴槽にどンドン注がれているのに、縁からはちっともあふれ出てこないことに注目するのも、循環湯を見きわめる一つのポイントだ。 【137頁】</p>
<p>“温泉力”のある温泉に浸かると、つい眠くなる。 【76頁】</p> <p>体験的温泉鑑定法</p> <p>私の体験から作り上げた鑑定法もいくつか(中略)</p> <p>良い温泉は湯に浸かっていると眠くなるというものだ。 【203頁】</p>	<p>いい温泉に入ると起きる生理現象</p> <p>人はいい温泉に出会えて、からだをふかふかと湯に浸すと、(中略) 全身が気持ちよく弛緩するのである。 【21-23頁】</p> <p>まさに湯床。だれもが心地よく寝そべってしまう温泉が名湯でないはずはない。 【146頁】</p>
<p>温泉は母親の羊水を連想させ、胎内回帰願望を満たす、というのがかねてからの私の持論だ。 【155頁】</p>	<p>温泉の愉悦はまた、胎内で温かく浮遊していた羊水感覚を想起させる。 【24頁】</p> <p>※温泉入浴は(中略) あたかも母なる羊水に包まれているような温かさなのだ。</p> <p>【1993年3月刊「脳閑休暇のすすめ のんびり温泉」388頁】</p>
<p>私が提唱したいのは、「温泉のディスクロージャー(情報開示)を！」なのだ。 【113頁】</p> <p>正しい成分表の揭示が第一歩 【114頁】</p>	<p>温泉分析書は、温泉の中身を知る唯一の客観的手だてといつてよい。 【154頁】</p> <p>※情報公開が不十分なのは(中略)「温泉分析書」</p> <p>【『本物の温泉ここが一番!』66頁】</p>
<p>まず泉温という項目を見ていただきたい。(中略) 泉温が最低でも四五度を下回るようだと、湯を沸かしなおすことになるはずである。 【120頁】</p> <p>次に見るべきなのが湧出量という項目である。二〇リットル、三〇リットルとなると要注意である。とくにこの程度の湧出量で(中略)間違いなく循環風呂だろう。 【120-121頁】</p>	<p>温泉分析書や揭示証でポピュラーなのは、泉質と泉温(源泉の温度)だろう。泉温を見れば、加熱かどうか予想できる。 【154頁】</p> <p>揭示証にたとえば、毎分当たり一〇リットルと湧出量が記されていれば、これは湯量が少ないと推測もできる。(中略) 循環湯を見きわめる一つのポイントだ。 【136-137頁】</p>
<p>しかし自然湧出していた古湯は良質な温泉が多い。芦之湯には二軒、箱根でも一番古い温泉がある。 【185頁】</p> <p>【付記】 芦之湯は三軒。箱根で一番古い、というのは誤り。</p>	<p>源泉が自然湧出していた古湯 【54-55頁】</p> <p>自然湧出一〇〇%の源泉をなお利用できている源泉は、今日立派な名湯である。たとえば、箱根の芦ノ湯温泉もそうだ。 【144頁】</p>
<p>松尾芭蕉は、温泉にあまり興味がなかったようである。各地を歩いているのに、温泉のことをほとんど書いていない。(中略) 鳴子の近くの赤倉温泉を通っているのに、その温泉に入った記録がやはりない。ところが加賀の山中温泉は絶賛しているのだ。(中略) ここの「菊の湯」という外湯のことを最高級の温泉だ、有馬にも劣らない温泉だと最大級の賛辞を与えている。実のところ現在では循環湯もないわけではない。 【200-201頁】</p> <p>【付記】 先立つ『列島縦断2500湯』の石川県の温泉記述では、「温泉街の“顔”である総湯に入り比べると、(中略) 山中は非加温、流しっ放しの正当派」と絶賛していたが。</p>	<p>松尾芭蕉は温泉嫌いだった!?</p> <p>『奥の細道』を読むと、風呂や温泉に関心のない温泉嫌いに見える。(中略) 鳴子をはじめ温泉はずべて無視して通り過ぎていった。</p> <p>芭蕉が温泉好きになった山中温泉</p> <p>ところが、旅の後半になると一転して、初めて深々と心ゆくまで源泉に浸かり、(中略) 芭蕉の心を揺さぶった名湯。それは石川県の山中温泉だった。(中略) 残念ながら総湯「菊の湯」自体は現在では循環湯方式になった。 【25-28頁】</p>

<p>浴槽や浴舎の材料なども非常に重要な温泉の要素なのだ。気持ちいい温泉は、やはり地元の木材や石などをを使って造られているものが多い。湯そのものが大事なのはいうまでもないが、こうした周辺のものも醸し出す匂いや雰囲気も湯とマッチしたものであれば、その効果はさらに上がるだろう。 【203頁】</p>	<p>源泉をたたえた湯船の陶酔も条件 名湯の第二の条件は、(中略)新鮮な源泉をたたえた湯船を主とした入浴の場のたまたまいにかかわる。(中略)温泉と温泉が育まれた土地の天然素材のハーモニーが、湯に浸かる人間にも感じられて共鳴し、気持ちよさが増す。(中略)宮城県の青根温泉は…石造りの湯船がある。 【145頁】</p>
<p>肌が知っている温泉の味わい もう一つ、何より重要な「味わい方」は、お湯を肌で味わうということである。(中略)お湯につかることは皮膚が直接お湯に触れるということだ。皮膚はヒトのからだの中で、最大の臓器と言われる。仮に皮膚を押し広げれば、成人男性の平均が一坪の半分ほど、約一・六平方メートル(女性の平均は約一・四平方メートル) 【『温泉力』48-50頁】</p>	<p>温泉を見つめ直す原点は皮膚 温泉が人を癒すというまなざしから、もう一度人と温泉との出会い、接点を考えると、温泉と皮膚のふれ合いという原初点に戻る。入浴すれば、温泉は首もと近く皮膚を浸し、包み込む。(中略)皮膚はただの忠実なバリア役、保護層であるばかりではない。成人の皮膚の表面積は約一・六平方メートル。人体最大の器官である。 【99-100頁】</p>
<p>湯治の原点からして、温泉のお湯そのものを四感で味わうのが理想的な湯浴みの形だ。触覚、嗅覚、聴覚、そして味覚である。もう一つの感覚に視覚があるが、これは後で検討する。【同144頁】(先に、温泉は四感で味わうものと述べた。【同150頁】) 湯治の原点は、お湯を四感で味わうというのが基本だが、場合によっては、あるいは人によっては温泉力のリストに風景という力を加えることが必要である。(中略)さらに、忘れてならないのが、お湯の「色」である。(中略)今、視覚も温泉力の重要な一要素となった。 【同『温泉力』152頁】</p>	<p>五感すべてで温泉を楽しむ 繰り返して強調するように、温泉は肌で感じ、五感全体でつかみとっていくもの。そうしないと温泉のよさは一面しかわからず、あまりにももったいない。 【155頁】 ※温泉は五感全体で味わい楽しむ 同書で、見る 聴く 嗅ぐ 味わう 触れるの五感別に温泉の味わい楽しみ方を初詳述。主な源泉の色に応じた泉質、主な源泉の味に応じた泉質などを初めて紹介した。 【『本物の温泉ここが一番!』74-77頁】</p>
<p>長野県の観光地、地獄谷の温泉につかっているニホンザルの幸せそうな表情を見ていると、温泉がヒトを幸福にすることが類推できるのではないか。 【同上49-50頁続き】</p>	<p>長野県の地獄谷温泉は、野生のサルが入浴することで有名だ。(中略)湯のなかで瞑想する温泉達人(猿)。じつに気持ちよさそうだ。彼らの顔には、ちょうど人が湯に入っているとき表す恍惚感にじみ出ている。 【18頁】</p>
<p>一口に食塩泉といっても、肌に合ったり合わなかったりする。人間と一緒に温泉にも個性が合って、世界に二つと同じものはないんです。 【『温泉教授・松田忠徳の日本百名湯』9頁】</p>	<p>一口に単純温泉といっても、単に中身が薄いわけではない。幅が広く、逆に単純一律といえない温泉だ。(中略)このように人間同様、十湯十色。姿かたちが似ていても、一つとして同じ温泉はない。 【90頁】</p>
<p>僕はね、これから「古湯ブーム」をつくりたいんですよ。(中略)少なくとも1000年以上の歴史を持っている温泉のことです。 【同『温泉教授・松田忠徳の日本百名湯』13頁】</p>	<p>第二章 源泉は新しく、温泉地は古いほどいい! / 源泉が自然湧出していた古湯 / 記紀に記された&lt;二〇〇〇年湯&gt; 【以上は第二章目次・各見出し】 源泉が自然湧出していた古湯 温泉に気持ちよさを、満足感を求める私たちにとって、あれこれのうんちくを超えて歴史のある温泉地、古湯にこだわる核心がここにはある。 【55頁】</p>
<p>別の面から見ると、脳下垂体が刺激され、ホルモンのバランスが正常になる。(中略)さらに、文字通り「気持ちがいい」という状態は脳内神経伝達物質のセロトニンをよく分泌させ、幸福感を抱かせると言うことが最近の脳研究で明らかとなっている。 【『温泉力』49-50頁】</p>	<p>温泉刺激というストレスは視床下部に伝えられ、CRFという、下垂体からACTH(副腎皮質刺激ホルモン)を放出する因子(中略)同時にベータ・エンドルフィンも程よく分泌させて、ストレスに対処するメカニズムをバランスよく整えさせる(中略)ベータ・エンドルフィンには脳内麻薬とか脳内モルヒネと呼ばれる。(中略)精神力や意欲に結びつく快感作用や多幸的感情をもたらす。 【24-25頁】</p>

(注) 石川理夫作成。

## 6 むすび

松田教授も一員である温泉・旅ライター世界では、宿や観光パンフの丸飲み、他人の借用は常態化していた。札幌国際大学の観光分野の教授職を得た松田教授は、その悪癖を引きずったか、これまで書きもしなかった温泉文化論の内容を盛り込むべく、他人の著述から論考アイデアを無断借用し、表現を少し変えれば日本の著作権法違反はまぬがれられると見たと思われる。それによって、相互批判検証を含む切磋琢磨と研究の蓄積が乏しい温泉文化分野で自ら「日本唯一の温泉学教授」なる箔を付けることを夢見た。

しかし、これは著作者、ましてオリジナリティーと引用・参考の明記を求められる学者・研究者の世界では絶対許されない盗作行為と見られて仕方あるまい。松田教授は責を負うべきであると筆者は考えるが、その判断は本稿を読まれた読者に委ねたい。

### 注・参考文献

- 1) 以下、本の刊行年月は奥付による。
- 2) 松田忠徳ホームページより。本稿では2006年8月時点で以前と変更のない掲載内容を記録している。
- 3) 前出2) ホームページや、朝日コム・トラベルサイト「温泉教授の湯治に行こう」プロフィールによる。ちなみに『温泉教授・松田忠徳の日本百名湯』（日本経済新聞社）9頁では、「最近、熊本県の黒川温泉がかなりブレイクしていますけど、人気の火付け役は松田先生だったんですって？」と持ち上げた対談相手に、「僕が編集長をしている『温泉主義』という雑誌で特集を組んだり、講演会なんかで黒川の魅力を話していたら、マスコミに広く取り上げられるようになって…」と答えている。黒川温泉がブレイクしたのは1983（昭和58）年以降の各宿露天風呂づくりと、1986（昭和61）年から地元が始めた入湯手形である。ちなみに筆者が黒川ブームを紹介したのは1990年代始め。松田教授が黒川温泉の急伸に驚き、その旨を日経新聞連載に書いたのは1998年7月のこと。講演会も1999年に教授職を得てからで、『温泉主義』の刊行に至っては2001年以降のこと。

- 4) 2006年8月20日時点で加盟数は全国17軒。
- 5) 日本温泉総合研究所ホームページより。
- 6) 7) 前出5) ホームページ「御名湯温泉組合長松田忠徳からのメッセージ」より。
- 8) 9) 10) 『温泉主義』第3号99頁、103頁。
  - 11) 前出2) 松田教授ホームページ。温泉法は昭和46年に環境庁設置に伴う変更として第三次改正はされているが、そもそも温泉の分類など記されていないのだから、「17種類の分類から11種に統合」など絵空事の世界。昭和54年には温泉法は改正すらされていない。これは松田教授の記述に一切出てこなかった鉱泉分析法指針改訂の適用年次との混同である。
- 12) 13) 『これは、温泉ではない』134頁。
- 14) 益子安「Kurmittelとしての療養泉」『温泉と環境』（健康と温泉FORUM'87）26～28頁。
- 15) 16) 『温泉力』180頁、同102頁。
- 17) 『温泉ゼミナール』36頁、同24頁。なお、2003年11月出版の拙著『温泉・法則』でこの点を指摘後、2004年1月に出た松田教授の『これは、温泉ではない』79頁では訂正した。
- 18) 前出3) 『温泉教授・松田忠徳の日本百名湯』11頁。
- 19) 『温泉主義』第4号86～87頁。さらに「かけ流し」も「私の造語」と主張するのは、『温泉教授の湯治力』83頁。
- 20) 前出2) 松田教授ホームページ。
- 21) 「列島縦断2500湯」の題名で1998年4月5日から1999年10月10日まで毎週1回連載。これが教授に推薦されるきっかけとも。連載の詳細は新聞全文検索で読める。
- 22) 『おふろの楽園』（共著、求龍堂、1994年9月）231～232頁。
- 23) 『湯治で元気になる 厳選50湯』（双葉社、1999年9月）189頁。
- 24) 温泉法施行規則第6条。
- 25) 1964（昭和39）年刊の川島武宜他『温泉権の研究』（勁草書房）9～10頁。
- 26) たとえば1988（昭和43）年11月刊の『大辞林』（三省堂）。
- 27) 前出『列島縦断2500湯』60頁。
- 28) 前出『湯治で元気になる』55頁ほか。
- 29) 『スーパージャンプ』（集英社）に1998年11月から2001年7月まで連載。
- 30) 例として2つ挙げる。日経新聞連載時「その元気なこと。これも温泉効果なのか」（1998年4月26日付）が『列島縦断2500湯』51頁では「その元気なこと。“温泉力”の賜なのか」と書き換え、連載時「すべての苦

- 労が帳消しにされたのだ」（1999年3月28日付）だけだったのが、本ではその後に「これこそ“温泉力”と言ったらいいだろうか」と新たに加えている。
- 31) 1999年11月24日付朝日新聞夕刊インタビュー「語る 松田忠徳の世界」より。
- 32) 33) 34) 35) 本項での引用は『温泉ゼミナール』10頁～14頁。
- 36) 環境省統計「都道府県別温泉利用状況」の温度別源泉数から「水蒸気ガス」源泉数のトップは大分をはじめ、鹿児島、宮城、秋田、福島、熊本、岩手県の順。
- 37) 38) 株式会社サンキョー・ホームページ「癒しの世界へようこそ」より。「濃縮温泉で心身の元気を」と題した松田教授推薦文も掲載されている。
- 39) 前出『温泉力』37～38頁、16～18頁。
- 40) 『全国お湯で選んだ“源泉”の宿』74頁。
- 41) 『温泉教授の湯治力』27～29頁。
- 42) イギリスの生物学者リチャード・ドーキンス博士による「ミーム (Meme) という造語がある。『imidas 1988』(集英社)ならびに『美と知のミーム』(資生堂、1998年)3頁。「文化の情報を持ち、模倣を通じて人の脳から脳へ伝達・増殖する仮想の遺伝子」の意味で、生物における遺伝子の役割のように、文化を創り伝達していく「文化遺伝子」の意味で用いる。したがって、他人の造語と断った上で、温泉の文化遺伝子「ミーム」が日本人には色濃く伝えられた、たとえば、共通の論議の土台に立ち得た。
- 43) 前出『温泉法則』16～22頁。
- 44) 2006年2月刊『温泉巡礼』(PHP研究所)、とくに25～34頁。
- 45) イギリス・バース温泉の泉源やフランス・セーヌ川の泉源地などから出土している。
- 46) 中世叙事詩『ロランの歌』(有永弘人訳、岩波文庫)14頁。
- 47) 付け焼き刃な温泉“文化論”は論理矛盾が目立つ。こんな記述もある。「日本に伝わる動物による発見伝説は、その考え(=温泉の原点は湯治、筆者注)を証明してくれる最たる事例(中略)野生動物たちはわれわれ人間よりはるか昔から、本能的に温泉の力を知っていた(中略)さすが(露天風呂に入っている、筆者注)“ニホン”ザル、温泉好きのDNAは彼らにも同様に伝わり…」(『週刊 日本名湯』「松田忠徳の温泉学講座」第23回)。動物発見伝説は世界的に見られるが、松田教授に従えば、温泉DNAは野生動物から日本人や、今日のニホンザルにも特別に伝えられた。
- 48) 『imidas 1988』(集英社)ならびに『美と知のミーム』(資生堂、1998年)3頁。
- 49) 前出「松田忠徳の温泉学講座」第20回。
- 50) 前出『温泉教授・松田忠徳の日本百名湯』11頁。
- 51) 1999(平成11)年10月刊『別冊サライ』(小学館)所収、八岩まどか「風呂好き日本人のルーツを探る」118～119頁。
- 52) 竹国友康著『韓国温泉物語』(岩波書店、2004年3月刊)2-4頁。
- 53) 前出「松田忠徳の温泉学講座」第28回。

# 塩原温泉郷の健康観光地としての可能性

## Possibility of Shiobara Spas as a Health Spa Resort

前田 勇\* 姜 淑 瑛\*\*  
Isamu MAEDA Sook-young KANG

キーワード：健康観光地 (health spa resort)・塩原温泉郷 (Shiobara spas)  
ヘルスツーリズム (health tourism)

### 1 はじめに

#### (1) 研究の背景

観光行動を生起させる有力な動機のひとつに、健康の回復と維持そして増進があることは観光研究の初期から指摘されていたことであった。しかし、健康回復・増進を目的とした観光をひとつの観光形態として位置づけ、「ヘルスツーリズム (Health Tourism)」と称するようになったのは1970年代以降のことであり、健康に対する社会的関心の高まりとともに観光の大衆化がその背景にあった<sup>1)</sup>。

ヘルスツーリズムは健康回復・増進を目的とした観光の総称であるが、具体的な展開の仕方と形態はさまざまであり、筆者らは「温泉地に代表される利用者受入れ地側が主導するタイプと、他の多くの旅行商品と同様に、旅行業者が健康の回復・増進にかかわると考えられる素材を集めて、一定のテーマ・名称を付して、旅行商品として販売するタイプとに大別することが可能である<sup>2)</sup>」と説明した。

観光客を迎え入れる側としても、健康に直接間接にかかわりをもつ需要の増大に対応するために、施設整備やサービス向上に積極的に取り組む傾向が顕著なものとなっている。とくに、日本国内各地の温泉地においては、地域としての魅力と特徴を打出すことを意図して、地域全体として健康増進への有効性をアピールしたり、利用客に特徴あるプログラムを提示している事例がみられるようになって

いる。そこには、多年にわたって温泉地の有力利用客であった企業・地域等を単位とした団体客が減少したことによって、それに代るものとして女性客や中高年齢者を中心として、広い意味での健康に関心をもっていると思われる顧客層を獲得しようとしており、地域全体を「健康観光地 (Health Spa Resort)」へと転換させようとする取組みもみられるようになっている。

「健康観光地」の語の意味するものは必ずしも明確ではないが、歓楽あるいは慰安を主たる目的ならびに行動とした観光地と対比的に用いられており、地域産品や健康食品の利用、散策や屋外での観賞や地域行事への参加などが可能な“健全な観光地”がイメージの共通要素であると考えられる。実際には、大型宿泊施設を中心とした施設内活動型ではなく、地域そのものを来訪者共通の活動の場として位置づけ、地区内温泉の共同利用などを可能にし、利用客の多様なニーズに対応してきた温泉地も以前から存在している。

一般に、温泉地の性格は温泉資源の特徴、立地条件、発展経緯、採用した施策や制度等によってそれぞれに異なっていると考えられ、いわゆる歓楽型温泉地とは一線を画して独自の取組みを行ってきた各温泉地を一律に「健康観光地」と称することは、需要の動向に呼応したものであるとしても、温泉地の特徴を端的に示したものとは言えない。課題と

\* 立教大学観光学部 (Rikkyo University) \*\* 耽羅大学 (Tamlla University)



すべきは、前記したようにイメージが適合する健康観光地が成立するための、施設・サービスをはじめ施策などの地域的条件がどのようになっているのかを、それぞれの温泉地について分析することであると考えられる。

## (2) 研究の目的と方法

本研究は、栃木県北部に位置しており、温泉地として長い歴史を有する塩原温泉郷を対象地として、同地域における湯治宿の経緯と現状、健康の回復・増進に直接的なかわりをもつ施設等の状況について分析し、塩原温泉郷が健康観光地として今後発展する可能性について考察したものである。研究方法は現地において資料収集をするとともに、関係者へのヒアリングをした。

## 2 古代の温泉文献

### (1) 成立と発展の歴史

塩原温泉郷は、平安初期以来の長い歴史を有しており<sup>3)</sup>、かなり古い時代から北関東有数の温泉地として知られていた。この地域は、何度も大地震に見舞われ、さらに戊辰戦争では官軍側と会津軍側の戦闘の舞台ともなり、破壊と復興が繰り返されてきた。

明治期に移ってまもなく、新政府から救済金の給付によって温泉地復興が始まり、湯治場としての営業が再開され、徐々に道路整備も行われるようになった。とくに、県令として三島通庸が福島県から赴任すると、まず西那須野から塩原温泉までの道路が、次いで塩原を經由して会津地区に至る道路が急速に整備された。この会津地区に至る道路は、三島の前任地であった福島県各地の自由民権運動弾圧のための軍用道路を意図したものであったとも言われている。三島は、塩原温泉郷の西那須野寄りに位置する福渡温泉に別荘をつくり、まもなくこれを皇室に献上したことによって塩原御用邸が誕生した。この御用邸は明治・大正・昭和の各天皇によって利用された。御用邸は後に廃止されたが、施設の一部は「天皇の間記念公園」に移設され、保存さ

れている。

また、文筆家の奥蘭田が1888(明治21)年に塩原を訪れ、著作『塩溪紀勝』を通して紹介したことがきっかけとなり、尾崎紅葉をはじめ数多くの作家が塩原に逗留したことによって、北関東屈指の景勝地として、また温泉地として全国に知られるようになった。

明治・大正期から1960年代半ばまでは多数の湯治場も存在していたが、それらは次第に温泉行楽型観光地へと変遷してゆき、さらに、東北新幹線および東北自動車道が開通したことによって、首都圏との交通利便性が飛躍的に向上し、1980年代末頃までにほとんどの宿泊施設が一般温泉旅館になった。

塩原温泉郷は、温泉郷へのバスが発着するJR西那須野駅から順に、大網・福渡・塩釜・塩の湯・畑下・門前・古町・中塩原・上塩原・奥塩原新湯・元湯の各温泉に古い時代から分かれており、一般に“塩原十一湯”と称されてきた。役場・郵便局等の行政機関は、明治期以来、温泉郷の中ほどに位置する門前地区に設置されており、また、JRバス塩原温泉駅はその近くの古町に置かれている。なお、中塩原・上塩原・奥塩原新湯・元湯の各温泉は、西那須野駅側からは奥にあたるが、もう一つの入り口である野岩鉄道上三依駅からは比較的近い所に位置している。

### (2) 塩原温泉郷の宿泊施設

塩原温泉郷を構成する各温泉別にみた現在の宿泊施設数は、大網1、福渡10、塩釜5、塩の湯2、畑下7、門前8、古町8、中塩原6、上塩原4、奥塩原新湯4、元湯3となっており、合計61か所の宿泊施設がある。この内、客室数60以上の施設は5か所であって、比較的規模の大きい施設は、門前と古町に所在している。塩原温泉郷全体の「温泉地宿泊施設構成類型<sup>4)</sup>」としては「中小規模型温泉地」に該当している。

### 3 元湯温泉「E旅館」の現状

#### (1) 元湯温泉略史

塩原温泉郷を構成する元湯温泉は、その名が示しているように塩原温泉郷の中でも最古の歴史を有し、834（承和元）年に僧空海によって発見されたと伝えられている。その優れた温泉効能から、江戸初期には「元湯千軒」と言われ、元湯全84戸数内、旅館が48戸を占め、湯治温泉としての賑わいを呈していた。しかし1659（万治2）年に大地震によって、温泉場の北端に位置していた「梶原の湯」を除いて、1村6泉のすべてが土砂に埋ってしまい、住民は他の土地への移住を余儀なくされ、温泉地としての再興は225年後の1884（明治17）年のことであった。

#### (2) 「E旅館」の歴史的概観

「E旅館」は、元湯温泉にある3軒の旅館の中の1軒であって、現在も湯治客対応を続けており、1659年の大地震を免れた「梶原の湯」と、さらに古い歴史をもつ「弘法の湯」とを有している。創業年は不明であるが、1889（明治23）年に隣にも温泉旅館があったことが記されている記録が残されていることから、元湯温泉の再興（1884年）と同時あるいはすぐ後であったものと考えられる。

開業以来長期にわたって、所有する源泉を利用して湯治宿として経営され、1980年代半ば頃までは田植えや稲刈りを終えた後の時期に、自炊で滞在する農民が多く、自炊客のための食品販売車も定期的に訪れていた。しかしその後、急速に交通の便が向上するとともに首都圏からの1泊だけの利用者が増加するようになってきた。一般宿泊客に対応するために宴会場を1960年代に設けている。

現在も利用されている「弘法の湯」は、その名が示すように弘法大師（空海）によって発見されたと伝えられる源泉であって、5～6分ごとに湧き出るかなり高温の間欠泉である。「梶原の湯」は、平安末期に源氏の武将梶原景時親子が傷の治療のために入浴したという古事から、その名がつけられたとされて

おり、炭酸泉のため後には「ラムネの湯」とも称され、胃腸病に効能がある温泉とされてきた。実際にも大正期には、この湯を釜で煮詰めて薬として販売していたことがあり、「胃腸薬・長命丸製造許可書（栃木県庁・1925年付）」が館内に残されている。現在も、この湯で炊き上げた“温泉お粥”を宿泊客の朝食に供しており、好評を博している。

#### (3) 「E旅館」における湯治客対応の現状

「E旅館」は客室13室で、全室とも部屋にはトイレや風呂はついてない。内3室が自炊客専用で、寝具類・ポット・テレビ・こたつ（冬期）・食器類が備えてあり、共同自炊場には鍋・フライパン、包丁・まな板、食器洗剤・スポンジ、ガス台・電子レンジなどを無料で利用できる。ただし、浴衣・バスタオル・ストーブは、それぞれ有料となっている。現在の料金は、一般利用の場合は平日1泊2食付で7,500～13,000円であり、自炊滞在の1人1泊料金は3,670円（完全自炊）、4,300円（半自炊）となっている。

現在、自炊部屋利用客の中で、湯治を目的とした人は2～3割程度で、スキーや夏合宿の宿泊場として利用する若者の方が多い。湯治客の場合も、高齢者よりも30歳代の若い年齢層が1人で1室を利用する半自炊型が多く、滞在期間は1週間から10日程で、関東近辺からの訪問者が多数を占めている。電車を利用する湯治客には、事前に宅配便を利用して食料品や荷物を送る人も多くなっている。滞在中は、湯治客自身による自主的な過ごし方に任せており、医療機関とのかわりには現在ほとんどない。短期間の一般客では、親睦会を兼ねて訪れる中高年層の利用が比較的多く、さらに近年には全国各地の“著名な温泉”を回ることをそのものを目的として訪れるというタイプも多くなっているとのことである。

同旅館は、湯治の宿であることをパンフレット等に記載してはいるが、短期間一般利用客が多数を占めてきたこともあって、湯治

客誘致にはさほど力を入れてはいない。今後、自炊部の施設を改築するなど、快適な自炊部屋作りを行いたいとも考えてはいるが、かつては自炊を好んだ客層も高齢化したことから食事付きを希望する傾向があるとし、自炊客用客室を増やす予定はもっていない。

なお、湯治客を含めて客室は2階にあり、また、温泉浴槽はかなり深く、身体の不自由な人の場合は利用にあたって付添い人が必要であることなど、幅広い層から湯治宿として利用されるためには改善すべき課題がある。

#### 4 所在する健康回復・増進関連施設と地域振興施策

##### (1)「クアホテルJ」

塩原温泉郷には、「クアハウスJ」がある。これは、(株)JA共済クアライフ栃木が経営する宿泊施設の1つの付帯施設である。宿泊施設は、JA会員を対象に「平日限定宿泊パック」「日帰り休憩パック」などの旅行商品を販売しているが、クアハウスのみの一般客も広く受入れている。

同宿泊施設は、開設とほぼ同時に館内にクアハウスを併設し、男女別に寝湯、ジャクジー、サウナなど9種類の風呂があり、無料で利用できる健康コーナーも設けられている。また、近年には男女それぞれの露天風呂を設置している。この施設は、健康とのかかわりを全面的に打ち出しているわけではなく、付帯施設にクアハウスがあることをひとつの特徴としているだけであり、この点においては、健康施設であることを最大の特徴とし、さらに健康改善プログラム展開の場として宿泊施設利用を図ってきた「クアハウス基点(山形県村山市)」とは基本的に異なっている。

同施設の場合は、むしろ“JAの宿”であることを強調することに主眼があり、それによって地域の他の旅館との関係維持を図ることに留意していると考えられる。

##### (2)「塩原病院」

塩原温泉郷中ほどの塩釜温泉に「塩原病院」がある。同病院は県医師会温泉研究所付属施設として、温泉医療を有効に利用したリハビリテーション医療を行うとともに、塩原地区の一般病院として設置されたもので、内科・外科の他に整形外科・リウマチ科・リハビリテーション科の各診療科とともに、泉温74℃の温泉を有しており、温泉利用プールでは歩行訓練や運動療法を行っている。

##### (3) 塩原温泉郷における地域振興施策

塩原温泉郷は、その“細長い”地形的条件を生かして、個人・グループによる利用客に温泉郷を川沿いに散策してもらい、自然や文化に触れてもらうことを意図した施設設置や地域整備を進めてきた。そのための中核施設として、JRバス塩原温泉駅近くに2003(平成15)年4月に開設したのが「塩原もの語り館(Shiobara Imagination Archives)」であり、塩原もの語り館管理運営組合(塩原温泉観光協会内組織)が運営にあっている。同施設は、塩原を訪れた文化人と作品を紹介する<風の人コーナー>、塩原ゆかりの人を紹介する<土の人コーナー>、塩原の自然と生物紹介などからなる「もの語りのアトリエ」、<農作物直売コーナー><テラスステージ>などから構成される「出会いのプロムナード」などから構成されている。「塩原もの語り館」の中に<足湯コーナー>が設けられていたが、2006年には川沿いの場所に数百人の同時利用可能を最大の特徴とした巨大足湯施設を新たに開設している。

#### 5 健康温泉地を目指した取組みの類型

##### (1) ヘルスツーリズムの展開形態としての地域的取組み

健康回復・増進を目的とする観光を総称したヘルスツーリズムの展開形態は、前記したように「受入れ地側が主導するタイプ」と「関係する素材を利用して旅行商品として販売するタイプ」とに大別することができる。受入

れ地側が主導するタイプはさらに、宿泊施設等事業者が健康の回復・増進に役立つと考える施設・サービスを導入して展開しているものと、地域内の複数の事業者等が共同して健康の回復・増進に密接にかかわる活動に取り組んでいるものとに区分することが可能である。

前者の宿泊施設等事業者によるものは、「リゾートやホテルが事業戦略として、温泉と各種対処方法を用いて治療や健康回復・増進を行うこと<sup>6)</sup>」「健康増進・予防のニーズに対応しようとする専門化されたホテルの試み<sup>6)</sup>」といったヘルスツーリズム一般に対する説明としても用いられている展開形態であり、実践事例は世界中に数多い。わが国においても、草津温泉のHVホテルをはじめ、いくつもの事例があり、鹿教湯温泉におけるSホテルの事例<sup>7)</sup>もそのひとつである。このような展開形態においては、主体はあくまでも個別事業であり、当該温泉地全体を健康温泉地と称することは適当とは言い難い。

これに対し、後者の地域内の複数の事業者等が共同して取り組んでいるものには、さまざまなタイプがあり、そのひとつにJA長野厚生連によって1956年に開始された温泉療養制度「ヘルスウィークかけゆ」、また、「人間ドッグ受診」と農村観光とを連動させようとした「やまとびあ（新潟県大和町）」など、地域医療機関が主導する形態がある<sup>8)</sup>。最も多くみられるのは、特定温泉地の複数の宿泊施設が共同して、健康回復・増進を期待する利用客を受入れる体制をつくり、誘致活動を行っているタイプであり、その中には地域の医療機関の支援を得て、滞在中に診察を受けられることを特徴としているもの（宮城県鳴子温泉郷など）もある。このような宿泊施設が共同して取り組んでいる事例のほとんどすべては、湯治客に対応してきた歴史をもつ温泉地においてであるが、地域の特徴と魅力を健康の回復・増進への貢献として表現しようとしている点において、当該温泉地全体を健康

温泉地と称するに相応しいと考えられる。

## (2) 健康温泉地の要件

どのような条件を有している温泉地を健康温泉地と称するかについての明確な規定は未だ存在していないが、次の各条件の内の少なくとも1つ以上に該当していることが必要であると考えることができる。

①地域内に所在する複数以上の宿泊施設が、健康回復・増進に密接にかかわりをもつ施設とサービスを宿泊客ならびに利用者一般に提供している温泉地であること。

②湯治場としての歴史があり、複数の宿泊施設が湯治客に継続して対応している温泉地であること。

③地域内に健康回復・増進に密接にかかわりをもつサービスを利用者一般に提供する施設が存在しており、当該地域の特徴となっている温泉地であること。

## 6 むすび ー塩原温泉郷の健康温泉地として可能性ー

以上の現状分析をふまえて、塩原温泉郷の健康温泉地として可能性を検討してみると、対象地は現在まで、地域として“健康とのかかわり”を積極的に打ち出してはいないが、周辺環境の良さや温泉病院の存在も含め、健康温泉地として発展する条件を基本的には有していると考えられる。しかし、地域の共通目標は観光客一般の誘致に向けられてきており、とくに交通の利便性が向上するようになって以来、地域としての課題は“温泉観光地として発展すること”に向けられてきたと評することができる。

長い歴史をもつ湯治客対応宿泊施設も存続しているが、地域の特徴として認識されているとは言えず、利用層、目的・利用形態の変化が顕著であることなどからみても、湯治を中心として、新たにヘルスツーリズムを展開することは地域的にも困難である。さらに、健康温泉地としてアピールしようとする場合、健康の回復や増進を求めて旅行する人び

との関心や行動形態が、以前とは大きく変化してきていることを考慮する必要があり、競争関係にある他の温泉地との差別化を図るために、新たな視点での施設整備も求められることになってくることが予想される。したがって、健康温泉地への展開を図ることは有効策であるとは認め難く、利用客一般の健康への関心の高まりを基本的に考慮しつつ、首都圏近郊に位置する行楽型温泉地としての発展を目指すことがより妥当であると考えられる。

#### 注・参考文献

- 1) 姜淑瑛 (2006): 「ヘルスツーリズム」。小口孝司編『観光の社会心理学』北大路書房、122～136頁。
- 2) 前田勇・姜淑瑛 (2004): 「鹿教湯温泉におけるヘルスツーリズムの展開」。温泉地域研究、第2号、1～8頁。
- 3) 「塩原の里物語」編集委員会編 (1998): 『塩原の里物語』。塩原町文化協会、14～21頁。
- 4) 前田勇 (2005): 「温泉地評価」の現状と課題。「第6回研究発表大会発表要旨集」日本温泉地域学会、20～21頁。
- 5)・6) 前掲1) 参照。
- 7)・8) 前掲2) 参照。

# 鎌倉市における温泉地の地域的変遷

## Regional Changes of Spas in Kamakura City

進 藤 和 子\*  
Kazuko Shindo

キーワード：鎌倉市 (Kamakura city)・温泉地 (spa)・自然湧出 (natural output of hot spring)・  
低温温泉 (low temperature hot spring)

### 1 はじめに

鎌倉市には多くの史跡が残されているだけでなく、明治初年にベルツ博士が海洋性気候の保養地に適していると提唱した土地でもある。以来、国内外人の別荘が建てられ、日帰りや宿泊施設を利用した海水浴による健康増進作用の好適地としても利用されてきた。

このような観光的要素の強い鎌倉という地域に、湧出温度は低温ではあるが温泉が湧いていた。かつて、潮湯治をする湯治客を集客した温泉宿が、扇ガ谷・二階堂・十二所・山崎・寺分の5地区にあった。海水浴に派生した塩(潮)湯のある宿泊施設や公衆浴場が造られていた時期もあった。

本稿では、鎌倉は健康のための入浴文化が民衆に根付いていた地域でもあり、盛況を呈した時期もあった点に着目し、研究を進めた。

### 2 研究の目的と方法

鎌倉の温泉地に関しては、現在宿屋が廃業し、記録も少ないまま忘れ去られようとしている。しかし、未だに自噴し続けている温泉が存在するという事実があり、その温泉で病を軽減したり田畑や山仕事の疲れを癒したという話が聞ける古老も健在である。

そこで、文献資料は少ないが、聞き取り調査は可能であると判断し、できる限りの調査を行った。

2006(平成18)年現在、鎌倉市内の源泉

登録は1カ所のみである<sup>1)</sup>。これは新しく掘削された温泉である。注目したいのは、この他にも個人使用の温泉井戸は多数あると見られ、その個人使用のうち、かつて温泉宿を営んでいた温泉井戸を有する個人宅もある。

また、明治から昭和時代に書かれた紀行文や広告、地図などに温泉の文字を見つけることができ、それらを手がかりにして、扇ガ谷・二階堂・十二所の3地域を訪ね、聞き取り調査を行い、文献を集めて整理した。

### 3 温泉の分布と特徴

温泉湧出地は大きく分けて海岸線近くと、海岸から約2.5km～4kmの内陸で谷戸と呼ばれる山際の2地点に分けられる。温泉旅館があったのは山際で、海辺には明治から昭和中期にかけて、海水を温めた塩湯の浴槽を備えていた宿があった(図1)。

現在廃業している温泉の特徴をまとめたのが、表1である。

表1 温泉地別温泉の特色

温泉地名	泉温	色	味	臭い	湧出状況
扇ガ谷	不明	褐色?	不明	不明	動力揚湯
二階堂	26℃	褐色透明	塩辛い	無臭	自噴
十二所	26℃	褐色透明	無味	硫黄臭	自噴

(注) 聞き取り調査による。

地質的には葉山・三浦半島の温泉湧出地と三浦断層との関係がありそうであるが、未調査である。

\* 雑誌ライター (magazine writer)



図1 鎌倉市における温泉地の分布  
(注) 聞き取りにより作成。

この地域で一般的に言えることは、岩盤が地表近くまであり、その上の表土は粘質土層が多く、それに砂泥や宝永年間の富士山噴火の灰などが覆っていることである<sup>2)</sup>。

温泉の泉質については、今回調査を行った温泉宿については分析を行ったという証言はあるが、すべて分析表を紛失していた。

凝灰岩の地質から水が豊富に湧出し、深く掘らなくても水が得られ、各所に井戸が多い地域である。ところが、水質は悪い土地とされていたのである。それは、澄んだ水が出る井戸と濁った水が出る井戸があったからで、澄んだ井戸は「五名水」「十井」などと言われ、史跡になっているほどである。他方、濁った水は「悪水」「赤水」などと呼ばれ、使用されずに捨てられたが、これらは温泉成分を含む鉱泉だったのではないだろうか。

色の付いた水を使用して、肌触りや臭いの違いなどに気付き温泉分析を行ったところ、温泉であったというのが、聞き取りでも確認できた。

十二所一帯では、井戸を掘ると茶色い水が出る場所が多いという証言を得たが<sup>3)</sup>、住宅地なので、何戸くらいが実際に使用しているかは不明である。

推測であるが、良悪と比べられるくらい正反対な色の水があちこちで湧出していたとい

うことは、温泉成分を含む水脈が地表近くに多く存在しているとも考えられる。

#### 4 扇ガ谷・二階堂・十二所地域の温泉

##### (1) 扇ガ谷温泉

建長寺から少し北鎌倉駅寄りにある長寿寺脇から南に開かれた、JR横須賀線の線路に向かう亀ガ谷切通しを下る一帯を扇ガ谷と呼び、この辺りに4カ所の温泉利用の記録がある。

この切通しは現在の県道21号の脇にある巨福呂坂の切通しより古く、鎌倉と北鎌倉方面を結ぶ道としては、近年まで交通量が多かったとされている。

温泉宿の記録としては、香風園・米新亭・養気園が1912(明治45)年発行の『現在之鎌倉』の営業一覧の温泉の項目に記載されている。1896(明治29)年発行の地図で確認すると、亀ガ谷付近に温泉の文字があり、カナメ山温泉、温泉のマークのみなどと表記は様々であるが、1941(昭和16)年まで確認することができる(以上は地図製作会社製)。1950(昭和25)年以降の市役所発行の地図には温泉の表記は無い<sup>4)</sup>。

##### ① 香風園

創業は明治年間(年不明)で歴史は古いが、2002(平成14)年に廃業した。

亀ガ谷の切通しを下り始めてすぐ、南に向かって左手にあった。要山温泉と称し、“頼朝隠し湯”の看板を掲げていた時期もある。要山とは谷戸が扇のように坂の下に向かって広がる地形の上部にあり、扇の要の位置に見立て日蓮教学の田中智学が名付けたものである。川端康成・久保田万太郎・里見淳・高浜虚子などの文学者が集い、執筆する宿として高名であった。

旅館の造りは2階建てで15部屋あり<sup>5)</sup>、敷地面積は不明である。日本庭園もあり、常時植木屋が手入れをしていたという。

温泉については、茶色なぬるい湯で、浴室は地下に降りた場所にあり、3人ほどしか入

れない岩風呂であった<sup>6)</sup>。宿泊客だけでなく、日帰りの入浴客も受けていて、料理も出していたという<sup>7)</sup>。父親に連れられて子供の頃によく行った<sup>8)</sup>などの証言も得られた。

現在はマンションや住宅になっており、源泉は個人住宅の所有となっている。

## ②米新亭

米新亭主人吉原仙之助氏の背後に、旅館の一部が見える（写真1）。

創業は明治年間である（年不明）。廃業は1939（昭和14）年であるが、第2次世界大戦が始まり、従業員や物資の確保が難しくなって廃業した。

天神湯と称し、香風園より300mほど下った左側にあった。1903（明治36）年に編まれた『日本海陸漫遊の葉』には、「扇ヶ谷英勝寺の北に温泉あり。近頃比鉦泉を分析せしに多量の炭酸を含み、湯治に効験あることを知り、米新亭なる温泉宿を新築して客の入浴に便す。夏日は浴客絶ゆること無しと云ふ」<sup>9)</sup>の記述があり、創業年や経緯を推定することが可能である。

経営者は吉原仙次郎氏で小学校の教員をしながら妻に切り盛りを任せていた。文士の出入りも多く、小山内薫・海音寺潮五郎・金史



写真1 米新亭と主人

良などが滞在し、大岡昇平はここに逗留して女将から小遣いを借りて（まだ売れなかったので返済はしなかった）街に遊びに行っていたという逸話も残っている。

旅館の造りは2階建て、客室は14室、敷地面積は不明である。鉤型になった建物に囲まれるように庭があった。一部に江戸末期の建物を使用し、建て増しをして大きくしていったという。

温泉については自噴であり、分析の結果、主成分は硫黄（分析表は紛失）という記録が残る。温泉の色は、白く薄く濁ったり、黒っぽいなど、日によって変化があった。効能に関しては胃腸病・皮膚病・アセモなどに効くと評判であった。浴室はタイル張りで、かなり広がった。日帰りの入浴客は扇ヶ谷・小町・大町・雪の下など鎌倉町内の人々も多く、食事も提供していたと思われる。また、大八車で温泉を運びに来ていたという記述もあり<sup>10)</sup>、湧出量は豊富であったのであろう。

現在、旅館の建物は25年ほど前に建て替え、源泉は地中に埋めてしまった。

## ③養気園

『現在の鎌倉』に記載があり、広告からは料理旅館だったことを覗く事ができるが、場所や推移などを知る手がかりは無い。

## ④その他

切通しを下り線路をくぐって50mほど西に、養明の湯という温泉があった。これは清川病院が1972（昭和47）年に看護婦の宿舍とした敷地内に湧出していた。当時の理事長が、庭にあった井戸の周囲がいつも濡れているのに苔が付いていないことに気付き、温泉分析を行って温泉と判明した。以来、1993（平成5）年までの20年余り、患者の入浴用として鶴ヶ岡八幡近くにある病院まで運んでいた。温泉療法は特別に行っていなかったが、身体の不自由な患者への入浴に活用していた。

現在は持ち主が変わり、源泉の有無は不明である<sup>11)</sup>。前出養気園と同一の温泉である可能性もある。



## (2) 二階堂温泉

永福寺跡の通玄橋側角に温泉の空気抜き煙突があり、その向うに見えるのは、80年余り温泉を使用し続けている個人宅である（写真2）。

これは鎌倉宮の北東部、源頼朝が建立した永福寺跡にあった温泉である。大規模な発掘と国指定の史跡保存が行われる前に、永福荘という温泉旅館があった。その他に計画だけであったが、大町にあったあらめ旅館が近くで温泉掘削をし、営業申請をしている。

写真3は、1953（昭和28）年の掘削時に撮影された元温泉旅館永福荘の外観である。

この旅館の創業は、1932（昭和7）年～1935（昭和10）年ころと推定され、廃業は1941（昭和16）ころであった。永福寺（1192～1260年）跡にあったS氏宅に温泉が湧いていたのを譲り受け、磯見喜代松氏が温泉料

理旅館を創業したのであった。旅館建設のために昭和6～7年に発掘調査が行われている。

外観は城のようであり、玄関前にクルマ回しがあり、鎌倉駅からタクシーで来る客もいた。玄関に発掘出土品が並べてあり、客室は池に張り出すような離れ座敷で、釣りを楽しむ客の姿も見られた。料理旅館であるが、湯治客もいて自炊設備もあったようである。

温泉はチョコレート色で、浴室はタイル張り、男女に分かれていた<sup>12)</sup>。

二階建てで大きな池があり、玄関まではひな壇になっていた。2階は広間で、客室は離れのようにになっていた。山側には自炊室もあった。

浴室は玄関に向かって左側にあり、浴槽は1つで男女交代であった。今でいう健康ランドのような使われ方をしていて、土日には賑わっていた。遠くから電車で来る人もいた<sup>13)</sup>と、2証言に多少の違いはあれ、建物の特徴、自炊の点には証言の共通点がある。

もともと永福寺にあった広大な庭園の池の部分に、温泉の建物を建てるために遺跡に手を加えて造ったらしい。1981（昭和56）年度永福寺跡発掘調査の第4トレンチ部分の報告に「昭和6年の温泉旅館建設に伴って、池の土取りがなされたためと考えられる。島の上面近くでは、富士山の宝永年間の火山灰を確認する。（中略）温泉旅館の建設に伴い、周囲に切石を積み上げるなど大きく手が入れられたもの」とあることから、当時は池の遺構が残っていてそれを利用して池を作り、贅沢な造りの温泉旅館を建てたと推測できる。

しかし、温泉旅館としては短命に終わり、戦争中は軍事工場として使用され、戦後は松竹大船撮影所の寮となったが、1967（昭和42）年からの史跡保護のために、用地買収で鎌倉市の土地となり取り壊された。

あらめ湯は永福荘の源泉のある地点から15mほど離れた二階堂川の川縁りの茂みの中にヒーム管が建っていて、継ぎ目からの漏水に湯の花がついているのが確認できる。こ



写真2 二階堂温泉利用の個人宅



写真3 二階堂温泉の永福荘

写真提供 永福寺発掘調査主任調査員福田誠氏

れは、石渡敏三氏が掘った温泉であり、自噴している。ここに旅館建設をするため、1962（昭和37）年に申請し許可を得たが、一帯が風致地区のため温泉旅館建設を断念し、温泉は湧出させたままになっている<sup>14)</sup>。

その他に道路を挟んで向かいに移転したS氏宅は、新たに掘削したところ同様な温泉が湧出した。ポンプで汲み上げているが、現在も入浴用に使用するには十分な湧出量がある<sup>15)</sup>。

### (3) 十二所温泉

鎌倉から朝比奈峠を通り、金沢へ抜ける金沢街道沿いの十二所にある。この一帯も井戸を掘ると温泉が湧出する場所であるが、その井戸により泉質が微妙に違うと言われる。ここで温泉旅館を営んでいたのは十二所園のみであった。明王院より辰巳の方角にある石の上に弁天様が祭ってあって、その傍を掘ったら鉱泉が湧出したという記録が残っている<sup>16)</sup>。

十二所園の大きな土管のなかには、今でも温泉がコンコンと湧き出ている（写真4）。創業は不明であるが、廃業は1940（昭和15）年と推定される。

島田氏が始めた鉱泉宿「十二荘園」を、戦前斎藤氏が購入して「十二所園」として営業したものである。敷地は300坪ほどで、旅館の造りは2階建て、1階に浴室があり、その2階は広間が2部屋ある。別に一階に客室が3部屋あり、アケビの蔓を絡めた丸窓などがあり、違い棚が付いた数寄屋造りであった。

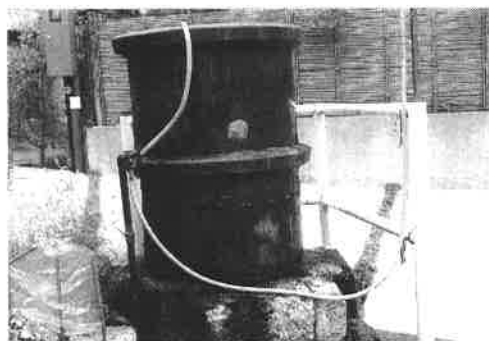


写真4 十二所温泉の温泉源

浴室は、日帰り客も多かったので、銭湯のように番台があって、男女別であった。仕切りに大きな鏡が付けられた脱衣所は20畳くらいの広さであった。浴室内も20畳くらいの広さで蛇口が5ヵ所ほどあり、そこから温泉が出た。タイル張りで、壁には富士山のタイル絵があった。

温泉は掘り抜き井戸で、源泉は地下約2.5mほどのところから自噴し、泉質は硫黄の香りがする透明に近い茶色の湯であった（分析表紛失）。

神経痛・痔・オムツかぶれに効能があると言われ、飲泉をすると胃腸病に効果があるという。

当時は薪で沸した湯を浴室の奥の部屋にあった元風呂に溜めて、浴槽への流量で湯加減をしていた<sup>17)</sup>。

温泉の湧出についての言い伝えでは、井戸を掘って水田に水を入れたところ、稲が育ち過ぎたので分析したら温泉だったという話がある。また、山の上に祭った弁天の近くを掘ったら、鉱泉が湧出したという記録もある<sup>16)</sup>。

利用客については、農業や山仕事をする十二所の人々に親しまれた農民温泉で、近所の子供を無料で入用させたり、二日酔いの人が出畑へ行く前に温泉を飲んで行ったというような昔話を聞くことができる。「周りは畑だけの静かな環境で金沢・横浜・東京方面からの湯治客が来ていた」「逗子の小坪から漁師が冷えた身体を温めるため、山道を歩いてやって来ていた」「広間では演芸をやることもあった」などという証言から、日本各地の湯治場との共通の点が見出される。また「二階の広間で芸者を呼んで大騒ぎをしているのを子供心に見聞きして、羨ましく思った」という話は、温泉のもつ歓楽的要素もあったことが推察できる<sup>17)</sup>。

現在は、建物を1974（昭和49）年に壊して個人宅に建て直したが、温泉は道に面した場所にそのまま湧出していて、直径60cm、

高さ75cmほどの土管を地上部で2本つなげた中に（地下は3本）自然湧出していて、上まで常時満たされて溢れたものは排湯している。使用は浴室のみで、近づくとき硫黄の臭いがして、細かな沫がぶくぶくと湧き上がっている。

## 5 その他の温泉

山崎と寺分地区にあった温泉は未調査であるが、山崎は天神山温泉・山崎園として1912（明治45）年発行の『現在の鎌倉』誌にその名が掲載されている。

寺分は陣出温泉と言われ、1940（昭和15）年発行の旅行案内書の地図に寺分の温泉を確認することができる。

塩湯については、由比ガ浜にあった海浜ホテル、材木座・坂ノ下・稲村ガ崎などに海水を沸す銭湯があった記録<sup>18)</sup>があるが、未調査である。

第2次世界大戦、何らかの影響を受けて廃業してしまった鎌倉の温泉の多くは、源泉を個人宅で引き続き使用している場合も多い。また、希望者に温泉を分けている源泉もあり、貰いに来る人たちはアトピー性皮膚炎への効果を期待している。

## 6 むすび

かつてあった温泉のことを憶えている人が少なくなっている現在、パンフレット・写真・資料などが残っているものが少ない。しかし、一般の人々が身心を癒すために温泉を利用したのは他の温泉地域と変わらないことが分かった。多くの文化人たちが集った宿もあることは鎌倉の特徴と言っても良く、鎌倉ならではの文化に深い関係がある場所もあれば、素朴な農村の湯もあった。

最近新たに温泉を掘って入浴施設を造ったり、他の温泉地から温泉を運んで入浴させる施設も出来ているので、自然湧出の温泉が利用されずにある鎌倉で、それらを再度利用の方向に向けることは可能である。

それと同時に、庶民の風俗文化の一つである温泉の歴史が埋もれないように、さらに調査研究を行っていきたい。

### 注・参考文献

- 1) 鎌倉保健所資料による。
- 2) 永福寺発掘資料による。
- 3) 60代男性の話による。
- 4) 鎌倉市中央図書館所蔵
- 5) 昭和49年版日地出版鎌倉地図
- 6) 50代女性の話による。
- 7) 60代女性の話による。
- 8) 90代男性の話による。
- 9) 鎌倉市市史紀行編
- 10) 吉原家私文
- 11) 60代男性の話による。
- 12) 70代男性の話による。
- 13) 70代男性の話による。
- 14) 60代男性の話による。
- 15) 70代男性の話による。
- 16) 十二所地誌新稿
- 17) 70代男性の話による。
- 18) 続・鎌倉記憶帳

その他、「現在の鎌倉、鎌倉もうひとつの貌、三浦半島の鉱泉」（調査資料・年代不詳）、「神奈川県皇国地誌残稿上巻」を参考とした。

調査にあたり、温泉保有者、写真保有者、鎌倉市文化財課、鎌倉市図書館平田氏にご協力をいただいた。心から感謝したい。

## シンポジウム

### 温泉と健康のための地域づくり

- コーディネーター：濱田真之（株・地熱社長）  
パネリスト：望月良和（伊豆の国市市長）  
“：高橋 誠（駒の湯源泉荘社長）  
“：宮川幸治（日本大学短期大学部助教授）  
“：鈴木基文（船原温泉船原荘社長）

寺田：大変長らくお待たせいたしました。開催に当たりまして、司会の方からシンポジウムのパネリストとコーディネーターの皆様方をご紹介いたします。

パネリストは、こちらから順に御当地駒の湯温泉源泉荘社長の高橋誠さん、お隣が船原温泉船原館社長の鈴木基文さん、そして、昨日懇親会でもご挨拶いただきましたが、地元伊豆の国市の市長の望月良和さんでございます。そのお隣が日本大学助教授の宮川幸司さんです。

本日のコーディネーターを務めさせていただきますのは、日本温泉地域学会理事長で株・地熱社長の濱田真之さんです。

それでは、濱田さんよろしく申し上げます。  
濱田：濱田でございます。よろしく申し上げます。

今回は、「温泉と健康のための地域づくり」という題でシンポジウムを行います。温泉と言いますと、最近はもうほとんど健康がペアになったかのような感じがあるのですが、それは個々の温泉旅館であったり、1つの温泉地であったりすることがあるかと思います。たとえば、1つの旅館で温泉を使った健康作りを売りにしているところは幾つかあると思うのですけれど、ある地域で温泉がたくさんあってそれをどういう風に利用していったらその地域の活性化に役立つのだろうか、そういう切り口でディスカッションしていきたいと思っています。それに関しましては、行政の方ですとかお医者様でありますとか、地元の実

際に温泉旅館を経営されている方ですとか、多様な意見を聞いて、その中でお役に立つような話になればと思っております。

私が順番にお願いいたしますので、10分程度でお話頂けますでしょうか。望月市長、先に口火を切っていただけますでしょうか。  
望月：皆さんこんにちは。今日のご苦勞様でございます。濱田先生のほうから振っていただきましたので、伊豆の国市につきましてお話をさせていただきますので、よろしく願います。この伊豆の国市は、昨年4月1日に旧伊豆長岡町・旧韮山町・旧大仁の3町が合併をして、5万人規模の新しい市が誕生したわけでございます。共通している部分と共通していない部分がありまして、共通している部分はこの旧3町とも実は温泉を持っているということです。しかしながら、一番古くて伝統のある伊豆長岡温泉でも、明治40年に温泉が湧出したということで、韮山は昭和6年、大仁は昭和24年ですので、温泉につきましては比較的新しい、後発の温泉地ということが出来ます。この地域については、狩野川が三島の方に向かって南から北へ流れており、この伊豆地区では狩野川の左岸側に温泉が出ているのです。その温泉の出ているところは、すべて富士山が見えないという大変奇しくも面白い状況です。たまたま韮山温泉は反対側に位置しているのですが、矢張り富士山が見えないので、大変面白い訳です。大仁の温泉はですね、大久保石見守や大仁金山の関係で良質な金も発掘されていたわけで

すが、掘っていく途中で温泉が出て、そこから先は掘れなくなったというようなこともありました。

旧伊豆長岡町については、古くから温泉が湧出していたということで、温泉地としては名前が通ってきたと思っています。新しくできました伊豆の国市で、伊豆長岡温泉は年間毎年 80 万人程度の宿泊客をお迎えしていますが、韮山町とか大仁については保養所的な要素が強い温泉場であるということです。

そんなことで、伊豆長岡温泉以外は今まであまり温泉の PR がなされてこなかったのです。しかしながら、私どもは新市を発足させるに当たり、「自然を守り文化を育む夢ある温泉健康都市」を将来像として掲げさせていただいた訳で、温泉を一番の財産にしながら安全で安心な健康作りへの取り組みをさせていただいているところです。これからの時代、特に高齢社会を迎えるに当たり温泉だけでなく、食から始まるいろいろな問題も是非健康に結びつけていきたい、なおかつ温泉をご利用いただきながら健康づくりをしていくためのいろいろな対策を考えてまいりたい、こんな風に考えているところです。いま特にやっておりますことの 1 つに、江戸時代から明治にかけて玄米食の研究をした石塚左玄に注目しています。

この石塚左玄は、日本人の健康とは何ぞやと言っているわけでありまして、これを私どもは伊豆の国市の健康作りの大きなキーポイントしたいと考えております。ですから、温泉地に遊びに来ていただいている方々が、食を通して健康というものを考えていただくということで、石塚左玄の食養学を普及して参りたいと考えております。また、今取り組んでいる問題点については後ほどお話をさせていただきますが、何か参考になることがあれば大変有り難いと思います。

**濱田：**望月市長、ありがとうございました。たまたま 3 つの伊豆長岡町・大仁町・韮山町が合併したけれど、3 つともちゃんと温泉が

あったというのは何か幸せな合併であったように思えます。ただ文献を読んでみますと、ものすごく古い温泉が湧いている記録があって、占奈というのは熱い水という意味でございましたでしょうかね、アイヌ語でそういう意味らしいので、ここは温泉地としての発展は明治以降のように思えますけれど、たぶんずっと昔からここに住んでいる人が温泉に入ってきたのではないかと私は思っております。それから、合併されてどういう風に町を作っていくか、温泉をどう利用していくかは幸せな夢のある町づくりだと思いますので、是非これを機会にお話を更に聞かせていただきたいと思っております。

今、行政のトップの市長さんからお話を頂きましたけれど、実際に温泉を利用して仕事をなさっている、一番前線にいられると言うんでしょうかね、駒の湯源泉荘の高橋さんからお話を頂きますでしょうか。

**高橋：**駒の湯の高橋でございます。

今、コーディネーターの先生から前線にいるということで話をしろということでございます。その前に、伊豆の国市について午前中の研究発表でもお話ししましたが、畑毛温泉が市長の話から漏れていたようなので仲間入りをさせていただきます。ここは非常に特色のある温泉地として、伊豆長岡とも熱海とも修善寺とも違った温泉地なのです。伊豆の国市の中にそういう毛色の変った温泉場があるということも、伊豆の国市の温泉群の特色として売り出すことができるのではないかと思っております。伊豆ではですね、県もそうですし、各町もそうですが、各施設も温泉と健康はペアだという考えの中から、健康やウェルネスについて色々な様々な取り組みをしております。そこで、ごく簡単に県の取り組み、それから市、町の取り組みをお話しさせていただきます、その後に私が自分の施設で取り組んでいる健康増進、ウェルネスのお話をさせていただければと思います。

先ず県が取り組んでいるものには、大きく

2つありまして、1つは癌センターの開院を契機に誕生しましたファルマバレー構想です。これは正式名称では富士山麓健康産業集積構想という分かりにくい名前なのですが、要するに色々な手法を活用して、旅館で健康産業も活性化していこうということで、構想の中に「かかりつけ湯」構想があります。かかりつけ湯に何十軒かの旅館が選定されているわけですが、その旅館を中心に、癒しと健康増進を提供していこうということです。私のところもそうですけれど、この会場のサンバレー富士見もかかりつけ湯に選定をされております。その辺については宮川先生が詳しいので、後ほどご説明いただければと思います。さらに、県が取り組んでいる事業で、「温泉マイスター」というのがあります。全国あちこちで似たような事業があり、群馬県や岡山の湯原温泉でもありますし、新潟の妙高でも福島のいわき湯本温泉でもやっています。大体同じようなものだとご理解いただければいいのではないかなと思います。それらとちょっと違うのがですね、地域住民を大いに巻き込んで、1つの温泉場ではなくて、県全体でやっていこうということで県の方はマイスターを1000人くらい作っていきたいと考えております。一般市民を巻き込んで地域住民とのコラボレーションを図りながら、地域の健康度の活性化を図ろうということだと思っております。いずれにしましても、簡単に言ってしまうとこれちょっと語弊があつて叱られるかもしれませんが、健康温泉地づくりのための観光振興と考えたらいいのかなと思っております。

以上2つが県の取り組みでありまして、次に各市、町の取り組みですが、伊東市では健康保養温泉地事業というのがあります。熱海市では温泉と医療の活性化を結びつけるためのNPOエイミックという機関が中心になって活動しております。エイミックの中心にいるのは温泉療法医の先生です。伊豆市の取り組みについては、伊豆市から来られたお隣の

鈴木さんの方からお話を伺えればと思います。

いよいよこれからが本題なのですが、私の宿でいま現実に何をしているかということですが、皆様のお手元に昨日のエクスカッションに参加していただいた方にはこういうA5版の小さなレジュメが渡っていると思います。その中に「湯楽」と書いたものがあります。湯楽とは何ぞやということなんですけど、こういうことをいうと叱られてしまうんですけど、私あまり湯治という言葉があまり好きではなくて、かといって温泉療養だ温泉保養だというのも非常に堅苦しい感じがします。そこで、なにか所謂健康とウェルネスを一言で表す言葉がないかなと考えていましたところ、実はお客様からアイデアをいただいたんですけれど、「お風呂入って体が楽になった」「お風呂入って楽しかった」と言われまして、お湯を楽しむ、お湯の湯と楽しむで湯楽と、お湯が体の不調が楽になるので、お湯と楽で湯楽、湯楽で行こうと、いま私どもで売り出し中の言葉なのです。湯治に代わる言葉として、湯楽をPRしていこうと考えております。

そこで、湯楽でどういうことをやっているかと言いますと、入浴セミナーです。これは何泉が何病に良いとか、どこどこ温泉は何泉ですよという、温泉マニアの希望に応えるためのセミナーでは全然ありません。お風呂で年間1万3000人ともいわれる方々が、毎年、温泉旅館だけではなく、ご家庭も含めて亡くなられていますので、恐らくお風呂での事故はその数倍はあるように思います。そういう事故を1パーセントでも減らせれば良いだろうということで、安心・安全のための入浴の助言をしているところです。

これは私が1人で声高に叫んでもなかなか広がっていきませんので、このセミナーを取り合えず従業員にも紹介し、お客様から聞かれたときには簡単に受け答えができるようにしております。今日その資料のボリュームがかなり大きいので、皆様の方はお持ちしてい

ないんですけど、何部かまだございますのでもしご希望の方がございましたら、シンポジウムが終わった後、言っていただければと思います。

次にやっていますのが、湯楽健康体操です。これはお風呂上がりのストレッチ体操です。腰痛体操とか肩こり、そういったものに対応しております。健康体操の中に、整体ですとかリフレクソロジーといったものも含めております。

それから3番目ですが、湯楽健康料理ということですね。これは後で多分お話になってくと思うんですが、先ほどの市長のお話にあった石塚左玄、マクロビオティック運動に繋がってくるのです。これは地産地消にも繋がると思います。地元の食材を十分生かしながらですね、有機米とか薬草も使って、美味しい料理を提供していこうと思っております。薬膳、薬草料理と言っても食事は美味しくなければ駄目だというのが私の考えにあります。何で私がこうしたことを行っているかと言いますと、自分が好きなことをやっている、自分の専門知識、たまたま薬屋という専門知識がありますので、その得意な部分を生かしたことをしているに過ぎないのです。どこから引っ張ってきたということではなく、自分の好きなこと得意なことをやってきた集大成が、最近の健康志向によってですね、まとめあげることができたと思っております。

**濱田**：ありがとうございます。最前線だけというのは失礼な話で、県の取り組みから市の取り組みまで上から下まで見通されているようです。それから畑毛温泉のように、伊豆長岡とは矢張り切り口の違う温泉がある、それはある地域に最も著名な温泉があることは事実なんですけれど、そういう温泉地の周辺あるいは近くにはそれとはまた別の味を持った温泉があるという事実は、温泉と健康を見直していくときに自分の足下にどういものが潜んでいるのだろうかとか考えることに繋が

り、非常に重要なことです。それを活用して実際にその薬膳だ湯楽だという考えを持って、整体、料理それから健康のための多分散歩なんかも入っていると思うんですが、そういったことまで取り組んでいるのですね。それは恐らくまだ小さな点としての活動かと思いますが、更に広がっていくことによって、きっと温泉と健康そのものに繋がって、地域づくりまで発展する可能性があるのではないかと、今聞きながら思いました。

先ほど、かかりつけ湯というお話を宮川先生にさせていただけると高橋さんから言われたのですが、実際に健康と温泉との関わりでどういことされているのか、その辺りをお話しいただけますでしょうか。

**宮川**：日本大学の宮川と申します。どうぞよろしくお願ひします。

なぜ日本大学なのかということからご説明させていただきますと、私がおります日本大学短期大学部商経学科というのが、実は伊豆の玄関口に当たります三島にあります。先ほど高橋さんのお話にありましたように、この静岡県の東部地域で地域の活性化戦略というファルマバレー構想、今ファルマバレープロジェクトと呼んでいますけれども、そういった活動が始まりまして、矢張り地域の参加、産官学の連携が必要だと、是非一緒にやろうということで加わらせていただいたような訳です。

それで、先ほど概略はお話していただいたのですが、このファルマバレー構想は、元々静岡県の東部地域には医薬品ですとか医療機器を作っているメーカーさんが非常に多くて、元々そういう素地があった、そこに非常に設備の良い、静岡県立の癌センターができて、それは三島市の隣の長泉町にあるのですけれど、そこを中心にしてシリコンバレーならぬファルマバレーを作っていこうとしています。そこで、東部地域の産業活性化と同時に、世界にもこれを発信していくという構想です。

その中に、先ほどの3つの戦略の1つにウェルネスの視点での町づくり戦略というのがあるのです。そこに、かかりつけ湯事業が位置づけられております。皆様のお手元に一枚の裏表のコピーなんですけど、伊豆かかりつけ湯というレジュメが入っていると思います。これを御覧になりながら、お話しさせていただきます。よろしくお願いいたします。

先ず、このかかりつけ湯という言葉を最初提言されましたのが、癌センターの山口総長です。勿論、お医者さんですので、かかりつけ医というところから多分発想されたと思うんですけど、山口総長からお聞きしておりますのが、現代という社会状況の中でストレスを抱えている人が非常に多いと、しかも高齢化が進んでいる、ですから健康人ではあるけれど、健康人ではない不健康人、ちょっと病気になる風診断されないけれど、限りなくそれに近い半病人、それから病人とに分けられるのだという話をされています。

それで、病人の方については医療施設、病院で手当をしなければいけない訳ですけど、健康人を含めて、健康人・不健康人・半病人といったストレスを抱えている方、この方たちに是非伊豆の素晴らしい資源、温泉を中心とした素晴らしい資源で、もっと心と体の健康を取り戻していただくというのが、かかりつけ湯のコンセプトです。

今見ていただいていると思いますけれど、そこに図が描いてありまして、そのような条件を備えた旅館さんに入ってください、理想を実現していただくということなんです。まずは、その図の一番背面におもてなしというところがあります。これはもう、当然宿泊施設ですと持っていなければならぬ絶対条件になっておりますし、真ん中に良質な温泉と書いてございます。これも絶対条件にさせていただきます。よろしくお願いいたします。

これは、お客様にとって一番良いものを提供する、一番良い温泉を提供するという施設に入っていただきたいということで、これも

絶対条件になっております。

それから、それを取り囲むように4つのもので書いています。

左の上からかかりつけ湯的健康プログラム、かかりつけ湯的健康メニュー、左下のかかりつけ湯の癒し体験、その右のかかりつけ湯の良心価格というのがあります。

これらはですね、それぞれの旅館さんで持っている特徴がそれぞれ違いますので、この中のどれか1つ以上を是非研いいただいて、他の旅館さんよりもそれをどんどん質を上げていただき、お客様に良い質のものを提供していただくということで、4つのうちどれか1つ以上ということで、設定させていただきます。

いま言いましたように、良質な温泉がその中心にあるわけで、これらの理念に賛同して、是非高い志を持って参加したいという施設さんに対しては、昨年からのかかりつけ湯というものに加わっていただき、今活動を始めたところでもあります。

それで、まだまだ全体の数は35施設です。これから増やしていこうと思っております。実はこういった観光振興を行う背景を申しますと、国内の観光客数が停滞・衰退していることは、どこの県でも一緒だと思うのですが、静岡県もその例に漏れません。特に、この伊豆地域は最近のピークが平成3年ですが、それに比べますと平成15年度は64%にまで落ち込んでおります。ですから、伊豆全体でこの減少傾向に歯止めを掛け、伊豆の再生を図らなければいけないのです。その母体になると言いますか、起爆剤になるものとして、かかりつけ湯という事業に我々は非常に期待しておりますし、是非一緒に応援させていただきます。よろしくお願いいたします。次第です。

**濱田**：ありがとうございます。

私、ファルマバレーって何なのだろうと思っていたのですが、薬品のファルマなんです。ですから、医薬とか作っているところがシリコンバレーのように非常に盛んなとこ



ろの谷ということで、ファルマバレーという命名をなさったのでしょうか。

そういう意味では、今かかりつけ湯の温泉旅館やホテルの名前を見ますと、当然ですけれど、必ずしも伊豆の国市にだけ集中しているわけではなくて、熱海とか伊東とかあるいは東伊豆とか割合地域的に幾つも分散して選んでいるのですね。多分そういう意味では、県レベルの地域づくりがそこでは行われていると思います。今、我々は伊豆の国市で議論させていただいていますけれど、他の行政の所から見たらどういう風に見えるのか、あるいはここはまた違った活動というか、何か動きをやっておられるという視点から、鈴木さん、一言お話願えますでしょうか。

**鈴木**：プログラムには、私の名前がないと思っています。鈴木と申します。

先ほどお昼を食べていて偶然高橋さんと同じ席になったばかりに、突然ここに引っ張り出されました。準備も何もしてません。多分まとまりのない話になると思います。お許しいただきたいと思います。隣の町伊豆市、船原温泉というところで旅館をやっています。部屋数が14部屋、旅館の宿泊料金帯が1万から1万5000円くらいの間で、多分一番大変じゃないかっていう層の旅館の1つです。

最初、私はこの健康の取り組みにまったく無関心でした。20世紀の間はまったく無関心でした。その契機になりましたのは、県が伊豆創造祭というのを2000年に行いまして、かなりお金を入れてくれて、艇入れをしてくれ、イベントを始めました。その前の年の1999年から、それを成功させるための勉強会・研究会を立ち上げてくれまして、システム研究会が7つできたと思います。その中の1つに温泉文化研究会というのがありまして、そこで隣におります高橋さんなんかと一緒に温泉を使った地域の再生、何かできないだろうかということが、この初めての出会いでした。

それまでは温泉療法って言ったって、湯治、

古臭い、何それ、もっとコンパニオンでも上げてもっと飲んでもらって、売り上げを増やさなければ旅館なんか上手いかないよって、今でも思っているところはかなりある訳ですけれど、それまでは私もそう思っていました。それがなぜ、今この席に座っているまでになったかと言いますと、温泉の入りの気持ちの良さが分かったんですね。温泉に入って、こういうストレッチやると「おーこんなに良いぞ、腰痛もこんなに緩和されるぞ」っていう入り方があったり、実はもう一つワッツっていう聞き慣れない言葉でしょうけど、Water 指圧の略なんですけれど、水に浮かんでのいろいろなリラクゼーション法があるのですが、それをやってもらったらなんと気持ち良かったことか、そんなことでうちの旅館でもこれを切り口にお客さんを呼ぶことができないかとなって、そこで意識の転換があったのですね。

そのワッツとの出会いのころ、ちょうど創造祭が進んできました、これはもっと地域をあげてやっていけばすごいことになるな、多分県は伊豆創造祭でそれを私たちに望んでいたんだろう、もう大きい会場でそこに何人お客さんが来たというイベントではない、それはやらないってはっきり言ってました。21世紀に向かって伊豆がどういう風になることができるか、その契機になるイベントだと、そのことが分かって行った事業とそうでない事業とで今の評価がまったく違っています。何にも残らなかったのではないかとされる事業と、これだけのものが残っているじゃないかと、すごく評価が分かれています。これから伊豆は何をすれば良いのかっていう、その1つの考え方が、その辺りじゃなかったかなって思っています。

それで、一緒にやっていた仲間とですね、先ず町へ行きました。町へ行って観光課、お客さんを呼ぶのは観光課なんですけど、その観光課とこれも地域住民の健康増進にも同じことをやって役に立つのではないかという話

もしまして、福祉課の担当も呼んでもらい、さらにこれが教育にも使えのではないかと教育委員会にも呼びかけました。縦割り行政の町の横の3つの部署の人たちに来てもらって、我々はこんなことを考えているのだけれど一緒にやってくれないかという提案をしました。多分最初、行政の方は戸惑ったと思います。縦割りでやっておれば良いことなんで、そんな余計なことをやらなければ文句を言われることもないわけですが、それを絶対必要だって、これから町も伊豆も絶対よくするために必要だからやろうよっていう話をしたところに、ちょうど上手い具合に県の新しい担当者が来てくれまして、この観光交流室の観光担当者が僕らのやることをヒアリングで聞いてくれ、「これは面白い、ちょっとやってみよう」ということで、すぐに県の補助事業で取り上げてくれたんですね。そんなことがあって、今県との連携、行政の中の位置づけ、市の中の位置づけ、そんなものが非常に上手い流れで出てきているのかなって思います。市の話をするすと、市の中にウェルネスセンターができています。少し問題があるかなと思うことは、先ほどからのファルマバレーにしるウェルネスにしる、県の東部だって言うくと県知事さんは先ず絶対にこの話をします。だけど、何をやるのか最も分かっていない言葉がこの2つではないかと思います。その2つとも絡んでいるのですが、それも市が作ったウェルネスセンターで何するのかなということも含めて、徐々にやっている訳です。

ウェルネスセンターも観光部門でお客さんをどうやったら呼べるかっていう部分と、もう1つは地域住民の健康増進にとって、行く行くは医療費の給付をどれだけ下げられるかということまで行かないと行政が成り立たないところまで来ています。こちらに伊豆の国市の市長さんがいらしてますけど、必要な経費だけで目一杯で、では市を伸ばすための投資をどこでやるのかと言ったときに、市長

がポケット裏にして言うのですが、「何もないよ」って。何とかするには、やっぱり医療費の辺りを検討する必要があります。みんな難しいから無理だよって言うのですが、それでもやっぱり何かしなければならぬ、行動が必要かなと思ってます。

多分それにはですね、行政と民間とが本当に発想を転換して、こんなことをするのかという取り組みをしていかないと、多分そこまでの実績が残らないのではないかと。そこで、そうした取り組みを伊豆の国市だけでなく、伊豆市も伊東市も伊豆全体でもし得たら、本当の文化が定着した世界に発信できる温泉というものを、伊豆の再生に繋がれるのではないかという、でかい夢を持ちながら今やっています。本当にできるかどうか分かりませんが、トライするだけの価値があると思っています。

多分、これはインバウンドにとっても、効果があると思います。この温泉事業で、多少の外国の方たちをモニターツアーですとか、体験で何度か受け入れていますが、「すごい、こんな文化があるのか」という感激を受けてます。

本当の温泉文化を知らせることが、世界へ発信できる伊豆の再生に繋がっていくと思います。

濱田：ありがとうございました。

私も伊豆のポテンシャルをすごく買っているのですけれど、この話を今日はここでもっと議論したいと思っております。実は寂しい話を逆にしますと、地域づくりは難しいと先ほど前田先生と話をしてしまして、「いや、君、そんなもの、災害でもないし纏まりやせんのだ、火山だ地震だ洪水だあって始めてまとまる」と、心理学的には多分心機一転みたいなものがあると思うのですけれど、こんな話が出ました。我々、色々温泉地づくりに関わっていると、温泉地の活性化のプロセスというのは、これは温泉地によって全部別なのですが、共通するところがある。それは何

かと言いますと、そこに外部の視点を持った若い人たちが何人か集まって、自分の個々の活動だけではなくて、お互いに横の連携をとって、「おまえ、何している」「こういうことしてる」って、いろんな議論を積み重ねていくところが、どうもありそうだと思います。典型的な例で言えば、湯布院の溝口さんとか志出さんとか中谷さんとか、ああいう方々は30年代に確かにこの温泉をどうしたら良いだろうかと思って、農協のイチゴの何かお金を借りて返す気もなくしてヨーロッパに3ヶ月行って来た。そして、向こうに行って刺激を受けてずっと考えて、さて湯布院をどうしたら良いんだらうというところから始まったのですね。それは1人ではなくて、皆と矢張り議論する、お互いに話し合うような中核となる若い方々がおられて、そこが発展の1つの核になっている、一番の起爆剤になっているのです。いまひょっとして、鈴木さんや高橋さんや宮川先生は、そういうお方なのかと思いつつ、感じていました。それに対して、自分たちの宝をもう一度再発見する。芸者さんがいて、それが素晴らしい文化だということもありますので芸者ツアーに来て宜しいんですが、温泉の入り方という意味では、こうしたら良いのではないかと再発見もあります。先ほどワッツ、ウォーター指圧と英語と日本語のチャンポンをおっしゃいましたが、確かこれはアメリカの言葉なんですね、本当に。指圧の良さを知ったアメリカ人が向こうで始めてそれをワッツと言った。だからこれも文化の逆輸入かもしれませんけど、そういう視点の転換とか、あるいは再発見とか、こういったものが若いジェネレーションから出てくる。それが、こんどはその行政を巻き込んでいかないと、なかなかそういうことができない。

行政も先ほどポケット裏返しにして何も無いよって言われて、バブルの頃のような状態とは違うのはよく分かるのですが、そしてそれをどういう風に巻き込んでいけば良

いかというような多分知恵があると思います。

医療費の軽減が温泉を活用することによってできるのではないかと、それから温泉がうんと活用されて人々が健康になっていけば、そもそも老人医療費が下がって来るではないかというのは、非常に説得力のある議論だと思うのですが、望月市長、それについてどういうお考えでございましょうか。

望月：実際に、私も医療費をどうやって軽減していったら良いかということにかなり苦心をしているところでございます。実は旧町の時ですが、癌検診の無料化というのをやらしていただきました。早期発見・早期治療が、結果的には医療費を下げる形にはなりました。しかしながら、これも1つは限界がある訳なんですね。お年寄りには大変喜んでいただいたわけですが、これは少し視点を変えていくことが必要ではないかと、そういう風に思いました。旧町の時に、実は伊東へ行く県道があるわけですが、そのところに地産地消の野菜の販売所を作りました。ここはそんなに面積ありませんが、その地域だけでできた野菜ものを販売することにし、かなりのこだわりを持っております。他の方からですね、例えば魚の干物を持ってくるとか、どこからハンペンを持ってくるとか、そういうようなことは一切しないで、その地域にこだわった野菜を販売するのです。まあ漬物や何かの加工品はあるわけですが、それをやった結果、今1年間に2億円の売り上げがあります。で、そこに関係をする方々のほとんどがお年寄りなんですね。お年寄りの方々がそういう野菜を朝4時に起きて朝取りをしてくるわけです。現在、出荷している方々が約200名くらい、毎月15万円くらい販売する方が40人以上もおりまして、一番売れる方はトマトを中心に月に60万円も売っているということで、真剣に競争で野菜作りをやっていたら、その地域の方々が病院に行っている暇がないのですね。

少し浜田先生の話と変わってくるわけですが、私どもはこの新しい市になって、今一番考えております中のひとつに、伊豆長岡温泉の食料の残渣、要するに生ゴミをどうやって処理したら良いかということです。その根っこになる部分が、先ほど申しあげました野菜作りだったわけです。新しく誕生しました伊豆の国市の中で、旧韮山では生ゴミの堆肥化を研究してもらいました。その事業化は進まなかったのですが、実はこの伊豆長岡温泉のホテル・旅館から出る残渣の堆肥化を図ったかどうかと言うことで、現在これを進めているところです。この堆肥化については、残留農薬の問題が出てきました。残留農薬を使った野菜や食物は、基準値以外のものについては使えないので、新しい耕地でこの残渣の堆肥でできる無農薬システムを導入しようということです。韮山というところは耕地がたくさんありますので、ここで新しい野菜作りをしていこうと考えております。その野菜は、実は医食同源の話がありますように、大きな歴史と文化を抱えている中国のものを考えております。中国 4000 年の歴史に学び、人間の体に合った、そして日本人に合った野菜作りを進めて行くことができるだろうということで、韮山の耕地で試験栽培をやっていくつもりです。中国野菜を生産することによって、目先を変えたそして健康によい野菜を作ることによって、私は新しい農業への出発ができると思います。そして、その新しい農業がこれから本当に健康で美味しい食材を提供し、そして伊豆長岡温泉のお客さんに食べていただけるようなお料理の提供になれば、これは大変素晴らしいことではないだろうかと思えます。

国土交通省が出している資料では、伊豆の観光客は何を求めてきてくれるのかというと、その約 65%の方々が温泉と自然なんです。その他、名所旧跡などもあります。そういう中で本当に美味しいものを食することが旅の大きな目的でもあるのです。

私はやはりこの温泉に浸かってのリフレッシュとともに、日本人の体はともかく穀物に適しているわけですから、伊豆長岡温泉で新しい中国野菜を使った素晴らしい料理が提供できるという形になれば、大変ありがたいと思っております。無料で癌検診をする中で、近年は十二指腸や大腸の癌の発症が大変多いわけですが、矢張り食物が関係しているので、野菜栽培を一層振興したいと思います。

それから、先ほど高橋さんからもお話がありましたように、特にこれからは一定の運動量が大切です。温泉を利用しながら、データに基づいたその人に合った健康作りは絶対に必要なことだと思っております、その利用の仕方をいま模索しているところです。同時に、食から健康な身体を作っていくということを是非やって参りたいと思っております。

皆様方のお手元に、入国心得という小さなパンフレットを入れさせていただきました。これは新市になったので、是非これを読んで伊豆の国市へ入国していただきたいということです。また北村先生からも少しアドバイスいただいたので、今パスポート事業を研究しています。このパスポートを持って行きますと、いろいろな特典やサービスが受けられるということです。

濱田：ありがとうございます。だいぶ多義に亘ってしまいましたが、働くことによって健康になる、それが食にも繋がってくるというのは非常に重要なことです。かかりつけ湯の中の良質な温泉という中心的な概念に対して、4つの柱があって、健康プログラム、癒しの体験、良心的価格、それから恐らくもっと重要なのは、ここに食と書いてあるのですが、宮川先生、これは温泉との関わりで言えば、どういう御提言をされているのでしょうか。

宮川：食につきましては、ウェルネスを実現する上で非常に大事なものだ和我々も考えています。それで、私どもの学校には食物栄養学科というのがございまして、そちらの先生

と一緒に研究を進めています。かかりつけ湯の旅館さんにお邪魔して、どのような料理を出しているのかを見させていただいています。

旅館さんには、板場に調理師さんがおられて、本当に見た目も綺麗で美味しい豪華な品数の多い料理を作っていて、それが旅館の大きな魅力の1つになっています。それでもって、旅館が成り立ち、観光が振興されてきたと思います。ただ、最近の状況を考えますと、どんどん高齢化してきております。それと生活習慣病というものが多くなっており、健康に不安を感じる方も増えてきているという現実があります。それで、食事に対して気を遣わなければならない環境が出てきたということもあり、実は我々の中では、調理師さんには栄養士さんの発想はありませんので、この調理師さんに栄養士の意識なり、方法、こういったものを入れたらどうかということを探しているところです。これは、後で近い将来に鈴木さんのところ、高橋さんのところにもお願いしようと思っっているんですけど、調理師さんのお話を伺って、栄養素、栄養に関する知識を持った人を導入して、その中から生まれてくる健康メニューの開発をしたらどうかと研究しているところです。実際に、ある1軒の旅館さんで夕食と朝食を4回ほど調査させていただき、カロリー計算等をさせていただいたんですけど、矢張り通常の健康食に必要なといわれるカロリーに比べるとものすごく高い栄養価のものが提供されているという結果が出ました。それは非常に美味しく見ても良く、お客様の満足度はありますが、彼らに生活習慣病などの何かしらの不安を抱えていらっしゃる方にとっては、それではちょっと困るわけです。最近は旅館により、そういった健康食メニューを出せるかというリクエストも結構多いそうです。特に伊豆はですね、1泊だけではなくて2泊3泊と連泊される方もあって、そうしたときに最初の日の夕食は豪華で良いけれど、2日目から同じものは食べたくない、もっと健康に良いの

を出して欲しいというリクエストも多いそうで、ここに栄養士の知識が活かされるのではないかということで、今健康メニューの開発を考えているところです。

厚生労働省辺りが、食育という言葉が最近よく出して、流布させておりますけれど、これは小さな頃から食事の取り方ですね、本当に健康的な食事の取り方を教えるということだと思うのですが、そういった傾向が今出てきておりますし、さっき言いました高齢化もあります。来年辺りには、団塊の世代と言われた方々が退職されて、多くの方が旅行に出る機会も増えると思われまので、そういったニーズは非常に多いのではないのでしょうか。ですから、この伊豆も健康食についての意識をもって、お客様に対する発信もしていけば、観光振興の1つの柱になるのではないかと期待をしております。

**濱田**：ありがとうございます。

食事の問題というのは、おそらく個々の旅館ではやりきれない面があって、自分は糖尿病なのだが、自分の糖尿病の症状に合った食事はとなると、必ずしも個々では対応できないと思います。

市長さんが言われたのに、健康な地産地消をしていくのに、長岡温泉で出てくるような食材の余ったのをコンポストに回す、これは環境問題としてとても素晴らしいと思うのですが、これが巡り巡っていろんな方面に波及し、それが今度は食事そのものも変えていかなければならないという発想にいつかなくなるとは思うのですが、この場合実際に食事を提供しておられる鈴木さんや高橋さんの立場としては、どういう悩みを抱えておられるか、あるいは温泉との関わりで言えば、こういう風な食事を出したいのだがといった御意見があったらちょっとお伺いしたいのですが。高橋さんと鈴木さん、お二方お願いできますでしょうか。

**高橋**：その食事のことですけれど、実は私、食事のことについては一度大きな失敗をして

おります。かかりつけ湯の中で食の問題が  
出まして、それではというのでカロリー計算の  
ソフトを買って、一生懸命板長と今日の  
夕食は脂肪が何グラム、タンパク質が何グラ  
ムで、総カロリーで何キロカロリーですと表  
示をしました。ところが、私どもの旅館にお  
泊まりになるお客さんは、既に持病のある方、  
自分でカロリーコントロールをされている方  
がかなりいらっしゃって、「ご主人勘弁  
してくれ、旅館に私たちはリフレッシュ、息  
抜きに来ているんだ、病院じゃないんだから  
このカロリー計算の表示を下げてくださいな  
か」と言われてましてね。自分では相当頑張  
ったつもりだったのですけれど、やはりちょ  
とピントがずれていたのかなと、すぐに半月  
くらいで止めました。それで、折角苦労した  
んだから、何か残せないかなと思って、脂質  
がどうの、塩分がどうのというのを止めて、  
総カロリー表示をしました。そうしたら中途  
半端なことはするなとまた叱られまして、結  
局これはもう正直止めました。旅館の中で、  
たとえば観光旅館的なところでウェルネスあ  
るいは癒しというものを元気な方が来ている  
ところ、いわゆる先ほどの半病人、不健康人  
が来ているのではないところは、それでいい  
のかもしれませんが、具体的な病気を抱  
えて糖尿病とか、高血圧とか、お医者様から  
既に指示を受けている方には不向きだろうな  
というのが実感でございます。

でも悔しいので、何かしなければいけない  
ということで、今食の問題で私が取り組んで  
いるのは、カロリー計算ということよりも安  
全な食を提供するということです。地元の葦  
山でエコファーマーというグループがありま  
すが、これは有機米を作っているところで、  
それが地元葦山地区で県内有機米の80%以  
上を生産しているんですね。地元の食材を  
使わない手はないだろう、これまさに地産地  
消の極みだろうということで、有機米を使  
ってましたところ、先ほどから話があります  
癌センターの、私これちょっと記憶違いかも

しませんが、癌センターの食堂では入院  
患者さんに私どもと同じ、これ偶然なんです  
けれど、有機米を使っているということで、  
これは非常に面白いなと思いました。昨晚も  
私のところにお泊まりになった方が、多分  
リップサービスだとは思いますが、お米が非  
常に美味しかったという評価を頂きまして、  
実はこれ有機米なんですとご説明いたしまし  
た。

食については、私どもの旅館のケースでは  
その程度で止めないと非常に難しいのかな  
と、病気を抱えている方がいらっしゃる施設  
においては、簡単にいかないのかなと思  
っております。

ちょっと話がずれますが、大仁町でやっ  
ている「まごころ市場」については、実は私も  
同じようなことをやっております、週に1  
回だけですけど朝市と夕市をやっておりま  
す。その取り組みですが、農協に声を掛けま  
すと話が大きくなって、農協の組合員がどう  
のこうのとなって非常に難しくなりますの  
で、農協の婦人部でいろんな加工品を作っ  
ている方に私の考えを説明したところ、同意  
してくださった方が1、2名おられました。そ  
れから、地元の農家の方でも私の話を面白  
がってくれた方がいまして、総勢3、4名で  
朝市と夕市を開いています。なるべく農薬を  
使わないでくれとか、朝取ってきたものを出  
してくれとお願いしてまして、これが大変  
な評判を得てまして、ちょっと金額ベース  
を言うと叱られてしまうんですけど、月に平  
均50～60万円の売り上げになっておりま  
す。年間500～600万円、これは事業とし  
ていけるのではないかとということで、実は今  
プレハブの小屋を作っております、これが  
後半月くらいするとできあがります。そこ  
でもう少し積極的に売ってですね、週に3回  
くらいやろうかなと考えています。すると、年  
間1000万円くらいの売り上げになります。  
私のところはと言いますと、その方々に販売  
は一切お任せしてありますので、私どもは売

り上げの手数料数パーセントいただくだけで  
すので、私としてはそんなに美味しい話では  
ないんですね、ただ一生懸命やってくれる農  
家の方、それこそ一生懸命働いて先ほどの市  
長の話じゃないですけど、「駒の湯に持って  
行くのに忙しくてしょうがないよ」、冗談み  
たいな話なんですけれど、「体調悪くても病  
院行っていられないんですよ」という話も聞  
くことがあります。

とにかく、その初めはですね、それこそ点  
でいいと思います。点で繋がって行って、点  
の方が何人かできてきて、大きな少しまと  
まりになった時にですね、行政とか農協とい  
う組織と組んでいくことを考える必要があ  
りますね。地産地消というの、いきなり農協  
でどうだとか、行政とタイアップしてどうだ  
かというのは、非常に難しいというのが、地  
産地消、食の問題に関する私の実感です。

**鈴木：**私のところも、実はやりました。ヘル  
シーメニューというのを4、5年前に作りま  
して、地元の町会議員さんたちの宴会があ  
ったときに、試しに出して金額も安く設定し  
たのですが、すごく不評でした。

これは料理だけではなくて、温泉の事業自  
体もそうなんですが、私らが面白いなって取  
り組むものはコアな部分だと思います。高橋  
さんも多分そう、私もやってこれ面白いな  
ってというのは、本当に今でもお客さんがリ  
ピーターになっています。もう脳梗塞の後遺  
症で病院行ってもこれ以上良くならないと  
いって見放され、それでも何とか良くなり  
たいというお客さんが来るのですよ。そうい  
うお客さんは、「俺はまだ良くなるかもしれ  
ない」という意欲があって、本当に良くな  
っていきんです。それを見て、本当に温泉や  
っていてすごく面白いんですけど、じゃそれが  
全体の中のどれだけかかっていうと、まだ1割  
いっていない訳で、他の90%以上のお客  
さんで何とか経営が成り立っているのです  
ね。その辺りが食にも言えるかなと思ってい  
ます。多分マスコミの方だとか、大学の先生方

とか、よく言われるんですけど、「山の中  
来てなんで刺身が出るんだよ」ということ  
を真に受けて、全部山菜で出しますと、料  
理が悪くなったといわれてお客さんがバ  
タッと来なくなるのです。多分2割の方  
には、すごく高い評価を受けるのですが、  
残りの大多数の方たちはやっぱり、「伊勢  
エビを食べたい」というのです。その  
辺りの加減が難しい。だけど、ま  
ったく何もやらなくていいのか、こ  
ちらにそういう気持ちがないのかとい  
うと、そうは思っていないで、それで  
今でもヘルシーメニューを出してい  
ます。それは、来たお客様がそれを望  
まれるかどうかです。私はもう年だか  
らそんなに食べられないというお客  
さんもいるし、病気が上がりだから  
というお客さんもいます。では、そ  
ういうお客様には、こういうコース  
があります、金額もこれだけ安くな  
ります、その代わりに、料理は普通  
のお客様に出る料理じゃなくて3品か  
4品、本当にお総菜みたいな料理に  
なりますけど、良いですかって言  
うと、是非そうしてくださいとい  
うお客様がいらっしゃいます。そ  
ういうお客様の需要、要望という  
ものを私らがどうやって聞いて  
対処できるかってところが重要  
です。これは料理のこともそう  
ですし、温泉の事業に対しても  
そうですし、多分旅館が提供  
して行かなければならぬいろ  
いろなサービスに対しても同  
じだと思っています。

**濱田：**ありがとうございました。

温泉地に求めるもの、多分高齢化とか健康  
の問題を考えていくと、今言われた2割の  
お客さんの数がおそらくは増えてくるん  
でしょうけども、いきなりそれに転換する  
ことができないというところに恐らく  
実際に経営されている方々の悩みが  
あるんだろうと思います。我々温泉  
のことをやっていて、こうした方  
が良いよって、理想論とか自分の  
思い描くことは言えるんですけど、  
温泉地にやってきて1泊2食の  
歓楽型の温泉を楽しむ方も当然  
おられる訳ですし、いろんな  
タイプがまだ混在している。バスの  
団体で来る人も当然まだ

いますし、そういうことを考えると、いきなり地域を無理矢理変えていくことはできないわけで、平凡な結論が出てしまいました。

もうそろそろ時間が迫ってきましたので、ここでこちらからのパネルディスカッションは終了にして、会場の方からご質問とか御意見を賜りたいと思っております。何かありませんでしょうか。

**由良**：長野県の上田市から参りました由良と申します。先ほど高齢者の方たちのあるいは健康を気遣われている方たちの宿泊と食事についていろいろ伺ったのですが、たまたま介護施設関連のことでちょっと調査を頼まれたことがありました。その関連というのは、ヘルパーさんとか介護施設のデイサービスの方たちのことですね。大体全国共通で、たとえば何万食というカロリーが大体定まっています、嚥下障害の方の食事、あるいは多少流動食だけでも噛めるものがある、あるいは少なくともカロリーはこうだよと、そうした中から複数のメニューが選べるのです。そして、介護されている方というのは非常に忙しいので、実はそれがフローズンミール、すぐに調理できてすぐ出せるということになります。当日行って自分でこれが食べたいと選んでもらうことで、つまり、いろいろ障害のある方たちは自分の健康状態が自分で分かっていますし、医者とも相談していますから、食べられるものは分かっていますので、メニューがあつてあなたの場合はこれが良いですよと表示されている中から選択すると、すぐ加熱して出てくるのです。そういうシステムが流通でありまして、私がいま伺っていて幾つか思ったのは、かかりつけ湯の中に出てくる食にしても、かかりつけ湯自体が伊豆だけではなくて、全国共通の言葉にしていくことが大切だと思います。そして、この食でも健康でも何でも共通の1つのキーワードで、産地自体でその地域に特色のあるものを加えていくと、それがプラスアルファとなって、全国的に意味のある取り組みになるのではないかと

と感じまして、意見を述べさせてもらいました。

**濱田**：多分、かかりつけ湯が全国に広がるような、あるいは世界に発信できるような普遍性を持っている部分と伊豆特有の部分があると思うのですが、宮川先生のお考えはいかがでしょうか。

**宮川**：今おっしゃいましたような形で広がっていくということに対しては、ものすごく期待できるわけですが、食事につきましては材料もそうなんですけど、さっき地産地消の話も出ましたが、微妙なところがございます。旅館さんも施設さんですね、食というのは旅館の特色、売りに当たるものなのですね。ただ、宿泊料金も旅館さんによって随分違いがございます、その中で工夫されて吟味されて出しておられるものなので、一律のものというのは非常に難しいのかなと思います。

健康に良いもの、安全な食を出すこと、安全な食材を使って健康によいものを出すというのは共通認識で構わないんですけど、中身についてはそれぞれの旅館、施設、地域による工夫にお任せして良いのかなと思っています。共通認識が広がることが大事であると思っています。

**濱田**：ありがとうございます。多分、旅館は病院ではないということが一番のコンセプトになるのではないかと思っておりますが。他に？

**前田**：立教大学の前田と申します。

さっき濱田さんの発言の中に、えらい過激な発言の部分だけが出てきましたが、どういう文脈で申しあげたかを話させていただきます。実は今回の温泉と健康のための地域づくりという視点の場合もそうなんですけど、基本的な考え方として、その戦略として考えなければいけないことは何かというと、何かをすることによって、現在の利用客を維持し拡大するというのを考えるという視点と、以前は利用してくれていたんだけど今はあまり利



用してくれない人を引き戻すという視点と、3番目に新しい利用客を獲得し発展するためを考えるのかというこの問題がある訳です。先ほど浜田さんが御紹介していただいたのは天変地異でもない、観光地って大きく変えられないんだという理由はですね、何かというと現在の利用客を維持する方策がもうお手上げだっていう時になってでは、前の経験や前の力のある方策がなくなってしまうので、新しい視点、高橋さんがおっしゃられるように若者・馬鹿者・他所者が出てきて、そこでももの考え方の基本を変えるということがないと、なかなかできないよということなのです。観光地としてできないのは、現在の観光客をどう維持するかをお考えになるわけですから、そのためにその維持を図るために健康という視点を加えるという、いわば言ってみれば現在のお客さんを見ながら、少しずつ加えていくという、現場の対応を見ながら微調整をしながら少しずつ調整を図るという問題と、新たにそういう視点を取り入れることによって、地域として従来とは違うマーケットを作るのだという問題というのはですね、似て非なるものなので、その点を十分検討していただきたいと思い、一言述べさせていただきました。

**濱田：**済みません、勝手に過激な発言にしてみましたけれど、多分お客様の中に実際に健康志向でこのヘルシー食で良いよという方ですね、折角温泉に来てこんな食事なのかという不満と、その辺はマーケティングの動向の差が如実に現れているところだと思うのですけれど。あるいはまたご質問でもあれば。また、それとは関わりのない質問でも結構です。

**八岩：**一応温泉評論という形になっています八岩と申します。

私ちょうど1年くらい前に、伊豆のかかりつけ湯を取材させていただきましたが、すごく注目してまして、その時のファルマバレー構想の中に、いままで修善寺なり天城な

どの点になっていた温泉を伊豆というトータルなブランドの中で展開していく、そのための1つのステップだとお伺いしたと思うんですね。実は、かかりつけ湯がかなり多くなってきたという気はしますが、やっぱり東が中心だなという気がしてまして、その時も西と東と南伊豆というのは、かなり文化が違っていてというお話も聞いたんですけど、伊豆をトータルなブランドとして展開していく上で、西の方との連携というのはどうなっているのでしょうか。別々の形で展開されているのだとしたら、たとえば松崎とか西伊豆というのはどういう形で取り組んでいるのか、もしご存じだったら、お伺いしたいのです。

**濱田：**私はどなたが適任か決めかねるのですが。

**鈴木：**かかりつけ湯の事業が最初に始まったのが中伊豆です。当然、東の方たちも参加していなくて、西の方にもだいぶ声を掛けましたけれど少なかったです。でも、今年度新たに新規の方を募集しましたところ、堂ヶ島の方からだいぶ参加の申し込みが来まして、4軒くらい、5～6軒くらいかな、今年は新規に入ってもらうことになると思います。まだ正式な発表ではないんですけど。その点については、かかりつけ湯の役員の方でも気にしてまして、中、東、南だけで西が抜けているけれどという話が出ています。

先ほど長野の上田の方からお話がありまして、これを全国展開というお話もいただいたのですが、私はかかりつけ湯の35施設、教育委員会の代表もやらせてもらっています。去年の7月に正式に立ち上がったばかりで、まだ1年も経たないうちにいろいろ問題があって、伊豆の中だけでも八岩さんおっしゃられるように、伊豆を1つに纏める起爆剤、契機としてこれが活用できるまでに、まだまだ何ステップも越えなければならないのが今の段階です。本当に地域ごとの活動も必要になってくるでしょうし、かかりつけ湯の施設の中で特化してやりたいというグループもあ

ります。その両方やりたいところもありますし、高橋さんのいう得意分野で関わっている方がおられるので、それぞれの興味を持っている仲間同士でも、これからは伊豆全体での展開を考えていかなければならないという状態です。

これが上手くいけば、本当に世界にむかって日本を発信できる、日本のインバウンドが世界に後れを取らないための施策として評価されるでしょう。周遊客だけ来れば良い、それがインバウンドだと私は思っていないので、本当の文化を味わってくれるような意識を持っている方がどれだけ来てくれるかが、本当のインバウンドで試されることだと思っています。

**濱田**：そろそろ時間もないので、あと2つばかりご質問を受けます。

**山田**：松戸の聖徳大学の山田と申します。

食の話に少し偏ったので控えようかと思うのですが、一言質問させていただきます。かかりつけ湯ということで、結局温泉に入ることが基本だろうと思います。その場合、先ほど癌センターの院長先生のお話を元に、病人、半病人、不健康人、健康人と分けましたけれど、この中の半病人というのはどのくらいの方をイメージをしているのか。具体的には、たとえば先ほど脳卒中の話出ましたけれど、介護保険でいうところの要介護1について申しますと、その中には脳卒中で半身が不自由で1人でなかなかお湯に入れないとこういう人が結構いるんですね。それで、私事なんですけれど、男兄弟3人で母親を温泉に連れて行く時に母親を女湯に入れることができません。どんな風にするかって言うと、具体的には女湯に人がいない時間に私がちょっと三助のような形でさっと入って、女の人が来るとちょっとお待ち下さい、5分お待ち下さいと、そういう形で入るんです。

何が言いたいのかというと、結局入浴の介助をするような人、この辺をマンパワーとして、ヘルパーさんなり介護副士さんなりと、

そういう方を旅館さんなりが確保したり、ボランティアで確保したりとか、そういうようなことをやる必要があるかと思います。そうすると、旅行会社が障害者の旅行なんて需要もないからという形でかなり否定的だったのですけれど、いまかなり広がっているし、やればやったでブランド力にもなるのです。先ほどの伊豆の国市の入国心得、ここにあるのですけれど、その中に「妙と湯の館、家族の館、とくと心許せる仲間と過ごす寛ぎの一時」とあるのですけれど、今言ったような男兄弟ばかりで母親を連れてくると、それが家族とお風呂の中でくつろぐのができないのですよね。貸し切り風呂とかいう手はありますけど。その辺のことも考えて、かかりつけ湯を発展させていただければ、大変面白いのかなと思います、意見も交えて述べさせていただきました。

**濱田**：それは多分、ここにおられる市長さんに強く言ういただければ、何か行政的なことを考えていただけるかもしれませんが。最後に甘露寺先生でしたかね。手を挙げられていたのは。

**甘露寺**：実はですね、今ここで話題になっている温泉と健康ということに関して、温泉気候物理医学会というお医者さんの学会がごいます。その中で、2、3日前行って来たのですけれど、50題近くの演題があって、その中の10題くらいが健康に関するものでした。お医者様が健康ということに学問展開を移してきているのです。お医者様がそういう風に移ると、当然ゲノムであるとか何であるとかとう難しいことも、介護の問題も含めて、そういうようなことに学会そのものも動きつつあるんですね。

ということで、前途は非常に面白いのですが、一番の問題、僕自身の経験からは、全部金太郎飴みたいに全国で健康と温泉、健康と温泉って、どこ行ってもそんなテーマになっている。そこでどうやって特色を出すか、そこが僕自身には見えてこないんで、その辺を皆さんで何とかお考えいただきたい、とい

うのが私の意見でございます。

濱田：済みません。それを議論し出すともうひとつのシンポジウムが要るので、これで終わりにしたいと思います。ただ、私も個人的には芸者遊びができる温泉地があっても良いのかもしれないと、自分はしませんけれど、思ったりもしますので、そういう多様な存在のあり方って言うんでしょうかね、あちこちで求めていって、同じ健康を求めるにしても、うんと歩くとか、単にゆったりするとか、いろんなオプションがあるのかもしれない。

それは参加していただいた方々の課題としてお持ち帰りいただきたいと思います。決められた時間を10分ほど超過してしまいました。お許し頂きたいと思います。本日はありがとうございました。

(濱田眞之 記)

## 資料①

### 鉄輪温泉の再開発と「むし湯」

河野忠之（鉄輪温泉温泉閣）・中山昭則（別府大学）

#### 1 はじめに

別府八湯の1つで、今日も湯治場としての機能を果たし続けている鉄輪温泉は、現在大きな変革期を迎えようとしている。別府市は2005（平成17）年度から5カ年計画で国土交通省の「まちづくり交付金」事業を活用して、鉄輪地区一体の再開発事業に着手した。このような地区全体の整備が実行に移されたのは、長年にわたって研究者や地元識者からも指摘されてきたものの、鉄輪温泉にとっては初めての経験である。当事業では、鉄輪温泉のシンボリック的存在である「むし湯（蒸し湯）」の建て替えが含まれており、2006（平成18）年8月25日に事業の先鞭を切って、新築された「むし湯」がオープンしたのである。

そこで、この計画の事業概要と「むし湯」建て替えに対する地域の動きについて、資料として提示したい。

#### 2 再開発事業の概要

「まちづくり交付金」事業は、地域の歴史・文化・自然環境などの特性を活かし、地域主導による活性化を図ることを目的として、2004年度に国土交通省によって創設された。別府市は2005年度より別府駅周辺整備事業とともに事業認定を受けた。事業計画は、2005年度から5カ年計画で「むし湯」の新築事業をはじめ、メイン道路の石畳道路化、ポケットパークの新設などの事業を盛り込んでいる（表1）。鉄輪温泉再整備事業費は5カ年で8億2,000万円、そのうち「むし湯」は2億円である。

この事業によって、別府市は観光客が浴衣姿と下駄履きで気軽に散歩できる雰囲気温泉地づくりを目指している。また、当地発展のシンボルといえる「むし湯」をリニューアル

表1 鉄輪温泉再開発計画の概要

事業名	事業期間
鉄輪むし湯温泉整備事業	2005(平成17)年
観光交流センター整備事業	2005
街灯整備事業	2005～2009
市道美装化整備事業	2005～2009
情報板整備事業	2005～2009
PR戦略事業	2005～2009
温泉管共同BOX	2005～2009
湯けむり景観まちづくり計画策定	2006
温泉遺産の復活事業	2006
モニュメント整備事業	2006～2007
鉄輪温泉ポケットパーク整備事業	2006～2007
大谷公園整備事業	2006～2007

(注) 別府市資料により筆者作成。



写真1 新旧の「むし湯」

(注) 筆者撮影。上段：旧、下段：新。

ルし、より幅広い層の利用促進を狙っている。さらに、地域の歴史性を重視し、地域住民に対して鉄輪温泉への愛着を持ってもらうことも意図しているといえよう。

新しい「むし湯」は、収容人員もこれまでの8名程度と比べると約20名で格段に増し、男女別となった浴室もゆったりとしている。全国でもここにしかない「足むし湯」も新設された。観光客の便宜を図るために、観光案内所（観光交流センター）も新たに設置した。

### 3 再開発の意味するところ

建て替え前の「むし湯」の利用実態をみると、平日は圧倒的に地元住民の利用が多かった。休日になると、主として福岡市など遠隔地からも利用者がやってきた。しかし、こうした利用者のほとんどは、リピーターで占められていた。一方、「むし湯」を利用しなかった宿泊客の半数は、その存在すら知らなかったと回答するとともに、鉄輪温泉に来て始めてその存在を知った宿泊客のうち、実際に「むし湯」を利用したと回答したのは僅か4.5%に過ぎない。つまり、建て替え前の「むし湯」は、地元の日常的利用者と熱心なファンによって支えられてきたといえる。自宅のお風呂のように利用している地域住民、および「むし湯」の雰囲気魅了され通い続ける常連客にとって、レトロチックで当然観光資源としての風格も増しているリニューアルされた「むし湯」は、どのように映るのであろうか。

このたびの再開発事業は、地域社会にとっても鉄輪温泉、そして「むし湯」を再考させる機会を与えたようである。1つには、地域住民による鉄輪の歴史を見直す動きが活発化している。例えば、「むし湯」とは一体何なのかという素朴な疑問から始まり、開祖と言われる一遍上人を調べ、その足跡を追うグループも誕生している。一遍上人と鉄輪の歴史性をより学術的に解釈しようとする動きもある。また、これまで幾度となく建て替えられてきた「むし湯」の歴代の場所を追う人々

もいる。さらに、鉄輪温泉を案内するボランティアガイドも組織されている。

2006年9月22日、鉄輪温泉では恒例の“湯あみまつり”が開かれる中、地元鉄輪共栄会の主催で「むし湯オープン記念シンポジウム」が開かれた。「むし湯」を学術的に検討してきた別府大学文化財学研究所の成果発表とシンポジウムが行われた。研究発表では、前述の通り「むし湯」の利用実態について、そして地域ランドマークとしての「むし湯」の特性について、さらに伝統的な共同浴場を近代的な建造物に建て替えた熊本県山鹿温泉との比較研究も披露された。シンポジウムでは、特異な地熱現象や全国的にも珍しい弱酸性の食塩泉という特性を活かすべきとの提言とともに、「むし湯」の原点と歴史性を重視した整備が必要であるとの意見も出された。

### 4 むすび

鉄輪温泉は「むし湯」とともに歩んできたと言っても過言ではない。今回の「むし湯」建て替えを中心とした鉄輪温泉の再開発計画は、今後その全容が明らかとなるであろう。今回の立て替えは、地元住民が「むし湯」を日常的に利用しているにも関わらず、観光施設としての色彩がより強くなった感は否めない。観光スポットとして人気も上昇する事が予想される中、新「むし湯」がどれだけ多様なニーズに応えられるのか、雰囲気が一新される鉄輪温泉の温泉観光地としての新しい道のりについて、今後とも注意深く見守る必要がある。

## 資料②

### スイスの温泉保養施設アルペントルメ

池永正人（長崎国際大学）

#### 1 はじめに

アルプス山脈に位置するロイカーバート村（Leukerbad）は、1501年に温泉観光が始まり、年間93万人（2002年）の宿泊客が訪れるスイス最大の温泉保養地である。本稿では、この村に1993年11月に開業した公共の温泉保養施設リントナー・アルペントルメ（Lindner Alpentherme）の施設内容について概説することにする。

#### 2 アルペントルメの設備

アルペントルメは、温泉保養地ロイカーバート村の核となる温泉施設であり、標高1402mの集落中心地にある。毎日平均600名がこの施設を訪れ入浴している。総面積11,000㎡のこの施設は、地上3階、地下1階からなり、医学療養・健康増進・美容・観光の広範囲の温泉効能を満たす高水準の建物構造となっている。また、アルペントルメに直結する地下駐車場には211台が駐車できる。

まず1階には、正面玄関を入ると通路の両側に喫茶店、スポーツ・ファッション店、銀行、相談案内所など活気ある店舗が配置され、

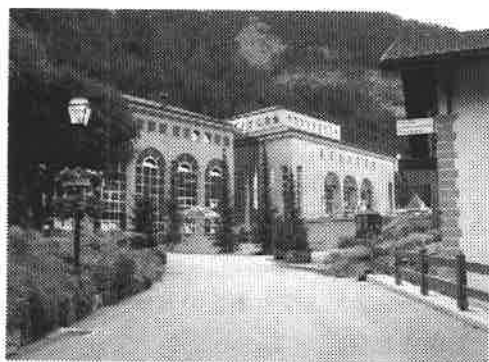


写真 アルペントルメ  
(2004.8.14 筆者撮影)

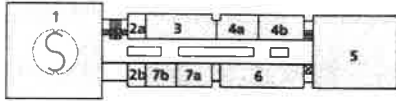
奥に向かって進むと屋内浴場に至る。隣接の入浴切符売場で料金を支払い入浴できる。

広さ200㎡の屋内浴場は、高さ6mのアーチ形のガラス窓が取り付けられている。浴場には、36℃の大きな浴槽と40℃の小さな浴槽があり、シャワー、ジャグジ、水中マッサージ噴射、マッサージ台、腰掛け、ソファーなどの付帯設備がある。アーチ形の窓の外には隣接する広さ300㎡の屋外浴場がある。浴槽の湯は36℃の温度に保たれているため冬季でも利用され、3000m級の山嶺の岩壁を眺めながらの入浴は利用客を魅了している。この両浴場が、アルペントルメで最も多くの人が利用する温泉施設である。

地下には26℃の25m温水プール、フィットネスセンター、鍼術診療室がある。そして、高いアーチの柱廊は、医療・美容分野の階上へと導く。2階は、医師診療室、レントゲン室、会議室、美容室などの医療・美容センターがある。3階には、ローマ・アイリッシュ浴場を中心として、療養・美容関連設備が整備されている。

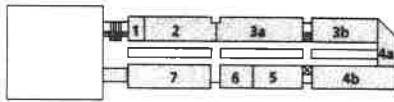
アルペントルメの温泉は、51℃の湯を毎分1,000リットル湧出するザンクト・ローレンツ（St. Lorenz）源泉から給湯されている。温泉成分は陰イオンの硫酸塩や陽イオンのカルシウムを多く含み、リウマチや血行障害、皮膚病などに効果がある。館内の浴槽は36℃に冷却して適度な入浴温度にしている。また、最新の制御循環システムは、1～3時間以内に館内の全浴槽の湯を循環させ、常に清潔な状態に保っている。8名の入浴マイスター（Bademeister）と技師は、掃除チームと連携して、徹底した衛生管理を行っている。

【3階】



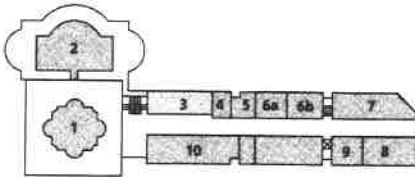
- 1 ローマ・アイリッシュ浴場
- 2a クローク／トイレ 2b クローク／トイレ
- 3 水中体操 4a 薬膳・芳香浴槽 4b 海水浴槽
- 5 ファンゴ（鉱泥）美容室 6 理学療法室
- 7a アーユルベダ室 7b マッサージ室

【2階】



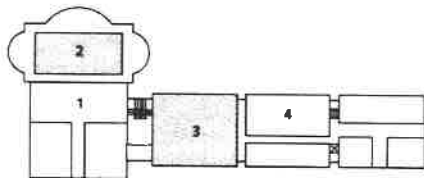
- 1 太陽灯照射室 2 医師診療室 3a 医師診療室
- 3b 中会議室 4a 小会議室 4b 大会議室
- 5 電気療法室 6 レントゲン室 7 美容センター

【1階】



- 1 屋内浴場 2 屋外浴場 3 入浴付符売場
- 4 相談案内所 5 高級理髪店 6a 雑貨店
- 6b 衣料品店 7 喫茶店 8 ヴァリス州銀行
- 9 スポーツ用品店 10 バー

【地下】



- 1 クローク 2 温水プール
- 3 フィットネスセンター 4 鍼術診療室

図 アルペンテルメの建物構造

(注) Lindner Alpentherme 2002 により筆者作成。

表 アルペンテルメの温泉成分表

区分	成分	mg/l	
陽イオン	アンモニウム	NH <sub>4</sub> <sup>+</sup>	微量
	リチウム	Li	0.052
	ナトリウム	Na	23.575
	カリウム	K	3.49
	マグネシウム	Mg	38.33
	カルシウム	Ca	431.82
	ストロンチウム	Sr	11.04
	バリウム	Ba	微量
	鉄	Fe	0.493
	マンガン	Mn	0.03
	アルミニウム	Al	0.008
	計	508.838	
陰イオン	亜塩素酸塩	Cl	6.198
	臭化物	Br	0.26
	ヨウ化物	J	0.041
	フッ化物	F	2.44
	硫酸塩	So <sub>4</sub>	1,162.9
	リン酸水素	HPO <sub>4</sub>	0.007
	ヒ酸水素	HA <sub>2</sub> O <sub>4</sub>	0.001
	硝酸塩	NO <sub>3</sub>	0.089
炭酸水素	HCO <sub>2</sub>	96.0	
	計	1,267.936	
	合計	1,776.774	

(注) Lindner Alpentherme 2002 により筆者作成。

3 健康増進プログラムの一例

(日程)

8:30 ノルディック・ウォーキング

60分(木曜日)

9:00 水泳療養 50分(月～金)

10:00 アクア・フィット 60分(月～金)

11:15 アクアの憩い 15分(月～金)

14:00 水泳療養 50分(月～金)

16:00 ノルディック・ウォーキング

50分(火曜日)

(効能)

①あらゆる年齢層に対する新しい水中運動プログラムである。水中でリラックスした気分になり、体調を整える。

②水中運動の際に、背中や関節に負担がかからず、全身の筋肉が同時に鍛えられ、他のスポーツ活動よりも多くのカロリーを早く燃焼させる。

参考文献

Lindner Alpentherme 2002

## 石川理夫著：『温泉巡礼』

PHP 研究所 256 頁 2006 年 3 月

1,300 円 (本体)

表題の「温泉巡礼」とは聞き慣れない言葉であるが、古今東西、温泉地は「ココロがやすらぎ、からだ癒される聖地（アジュール）として崇められ」、人々は（温）泉を求めて長い旅を続けてきた歴史がある。そこで、現代人も温泉地の歴史を学びながら「古湯」をめぐり、「温泉巡礼」の旅をしようというわけである。

序章では、巡礼とは「私たちにとって旅のひとつの姿」で、思い浮かぶのは、日本では「四国八十八ヶ所札所巡り」であり、ヨーロッパでは「スペインのキリスト教の聖地サンティアゴ・デ・コンポステラをめざす巡礼」で、実際に巡礼者姿の現代の若者達の楽しい写真が写っている。続いて、「温泉は古来、湯治場であり、聖地であった」とし、イギリスのバース温泉や、フランスのルルドの泉について紹介している。ルルドの泉は鉱泉水としての特別な化学的成分は見いだせていないが、これまで奇跡としか思えない治療例が認められているそうだ。

第 1 章「日本三大聖地を訪ねて」では、まず、和歌山県湯の峰温泉を舞台にした小栗判官の「再生」伝説が語られ、次に別府鉄輪（かんなわ）温泉では、一遍聖による蒸し風呂入浴法伝授の話、最後に群馬県草津温泉の「時間湯」で必死に病と向き合う人々の話が紹介されている。

第 2 章「聖地の湯守（ゆもり）」では、秋田県夏瀬（なつせ）温泉における女将の温泉復活物語、新しい湯守が継いだ箱根の姥子（うばこ）温泉、長野県野沢温泉における湯仲間「野沢組」の話が語られている。姥子温泉では筆者自身の治療体験が、また、野沢温泉では、昨年末、惜しくも亡くなられた老舗旅館「住吉屋」主人、河野正人さんの思い出が語

られている。河野さんは日本温泉地域学会の創立に参加され、理事でもあった。

第 3 章「温泉巡礼の旅を楽しむ」では、恐山温泉、須川温泉、肘折（ひじおり）温泉、湯田中渋温泉郷、有馬温泉、温泉津（ゆのつ）温泉、道後温泉、由布院温泉等が独自の視点から紹介されている。何れも著者が実際に歩いて丹念に取材した結果で、写真も豊富でわかりやすい。

第 4 章「こんな人も温泉巡礼を試みた」では、モンテーニュ（フランス）やヘッセ（ドイツ）のブロンビュール温泉（フランス）やバーデン温泉（スイス）での話、江戸時代の本草学者、菅江真澄（すがえますみ）の東北温泉巡り、明治維新に活躍した西郷隆盛の湯治など、興味ある話が尽きない。

各章で紹介された温泉地には宿泊施設やアクセス、照会先が最新の情報に基づいて記されていて、いつでも訪ねられる様になっている。『温泉巡礼』を片手に、まだ、訪れていない温泉地を是非行ってみたい気になった。

著者、石川理夫（いしかわみちお）氏は、温泉に関わる歴史、文化史に興味を持ち、ユニークな視点から温泉評論活動が続けている。現在、日本温泉地域学会副会長で、温泉地の地域振興のためにも努力されている。著書として『温泉・法則』（集英社新書）、『温泉で、なぜ人は気持ちよくなるのか』（講談社プラスα新書）、『心とからだを癒す四国遍路と温泉の旅』（宝島社新書）などがある。その他、温泉の歴史を楽しく読ませる本として、八岩まどか（やついわか）著『温泉と日本人』（青弓社）、『温泉と共同湯』（青弓社）がある。これらも是非一読をお薦めしたい。

（長島秀行）



## 書評②

### 山村順次著：『温泉地研究論文集』

千葉大学大学院自然科学研究科地理環境学研究室 601頁 2005年3月  
頒布価格2,000円（送料込み）

山村順次著『温泉地研究論文集』が、千葉大学大学院自然科学研究科地理環境学研究室から刊行された。本書はB5版601頁もの膨大な山村教授のオリジナル研究論文集である。その内訳は、46本に及ぶ研究論文の再掲のほか、5冊の温泉著書、82本の温泉地調査報告などのリストアップからなり、40数年間の山村の温泉地域研究の軌跡を知るのみでなく、第2次世界大戦後の温泉地変容の実態が浮き彫りにされている貴重な文献である。

ここで、論文の発行順に山村の温泉地域研究に関する業績を整理してみよう。最初の論文は、「東京観光圏における温泉観光地の地域的展開」（地理学評論1967年）である。そこでは、温泉地を入湯客数・宿泊収容人員・観光季節性・産業構成の変化などを指標として動態的に把握し、観光地域形成の外的条件として大都市観光市場からの近接性の強弱を分析した。続いて、「伊香保・鬼怒川における温泉観光集落の発達と経済的機能」と「伊香保・鬼怒川における温泉観光集落形成の意義」（地理学評論1969年）では、両温泉地の歴史の変容過程と社会経済的機能を対比して詳述し、観光資本の性格差や地域社会の開発姿勢の差異が温泉観光地の発展要因としてより重要であることを指摘した。同時に、「温泉観光集落の発達と機能—中伊豆の修善寺・伊豆長岡の場合—」（歴史地理学紀要1968年）を加えて傍証的な検討を加えたが、これらは1969年に東京教育大学（現筑波大学）へ提出した博士論文「温泉観光集落の発達と構造に関する研究」を公刊したものである。これらの論文は、観光地の分布論・形態論に終始していた従来の観光地理学の課題を一気に克服したものと言え、地域形成者の分析に視点をあてた構造論・機能論からなる山村の研究

姿勢は、新機軸となったのである。

1970年代以降今日にいたるまで、山村は意欲的に実証的温泉地域研究を進めた。東急・西武の中央観光資本による大規模温泉観光開発が展開した箱根や温泉観光都市としての熱海とともに、一方では湯平をはじめ鹿教湯・東鳴子・湯川などを事例に湯治場の研究に集中した。特に、東鳴子温泉では宿帳を駆使した湯治客の分析を行い、新研究法を開拓した。その後、入湯客の特性からみた日本の温泉地の地域的展開を体系的に整理し、一般的傾向を明確にするとともに、別府温泉郷・東八幡平・板室などの地域研究もまとめられ、さらに海外研究として韓国釜谷温泉の観光開発と地域社会の変化が明らかにされた。ドイツ・オーストリア・イタリアやチェコ・ハンガリーなどの東西ヨーロッパの温泉地、中国の温泉地などの海外研究も数多く行われた。近年では、小安峡・湯村・昼神など温泉地の地域振興策を提言する応用的研究に重点が置かれ、日帰り温泉地の地域的展開や温泉資源性と温泉地経営、温泉客の志向性など、新たな問題も積極的に取り上げて論文にまとめられている。

以上、山村教授の温泉地理学を整理すると、真摯な研究態度のもとで時空の統一的把握を目指して実証的研究を進め、地域活性化に資するような資料と知見を提供するとともに、研究成果の地図や表による表現などにも独自性が認められるのである。

ここに、温泉地域研究を真面目に志す学部学生・院生から教育者・研究者、さらには行政職に至るまで、幅広く本書を推薦したい。なお、本書の姉妹編として、山村順次著『観光地研究論文集』（482頁2006年）が発行されたことも紹介したい。購人希望者は直接著者に連絡していただきたい。（浦 達雄）

## 学会記事

### ●日本温泉地域学会第8回研究発表大会

来る11月27日(月)・28日(火)の両日、日本温泉地域学会第8回研究発表大会を鹿児島県霧島温泉郷で開催します。下記のようなスケジュールとプログラムで実施しますので、多くの会員の参加をお待ちします。

### 日本温泉地域学会第8回研究発表大会スケジュールとプログラム

開催温泉地：鹿児島県霧島市霧島温泉郷

協賛：妙見温泉観光協会

後援：霧島市

開催日：平成18年11月27日(月)～28日(火)

発表会場：霧島国際音楽ホール(みやまコンセール) TEL.0995-78-8000

宿泊地：霧島温泉郷硫黄谷温泉「霧島ホテル」 TEL.0995-78-2121

懇親会場：同上

視察会集合：鹿児島空港 11月27日13:00 (JAL東京便到着後、すぐ出発します)

受付：11月27日(月)18:00～18:30 霧島ホテルロビー

11月28日(火)9:30～10:00 霧島国際音楽ホール

参加費：一般会員・賛助会員2,000円、学生会員1,000円、その他1,000円(資料代)

懇親会費：会費は5,000円(学生3,000円)です。学会で「霧島ホテル」宿泊を予約した場合は、懇親会費は宿泊費に含まれます。

宿泊費：学会指定の霧島ホテルを予約した場合、懇親会費・朝食代込み、2名1室で1万2,000円です。宿泊参加数が増えた場合は、3名1室となることをご了承ください。

研究発表大会に参加される会員は、以下の参加形態によって郵便振替で学会事務局宛に相当金額を11月15日必着で前納してください。振込によって学会参加申し込みとします。

霧島ホテル宿泊+学会参加：12,000 + 2,000 = 14,000円

懇親会参加+学会参加：5,000 + 2,000 = 7,000円

視察会・学会参加のみ：2,000円

振替口座番号：00190-6-462149

加入者名：日本温泉地域学会

11月27日(月)13:00～17:30 視察会(無料)

鹿児島空港～焼酎公園～喜例川駅～妙見温泉(和気湯・犬飼滝など)～関平鉱泉  
販売所～鹿児島大学リハビリセンター～新湯温泉～霧島ホテル(宿泊・懇親会場)

17:30～18:30 休憩

18:30～20:00 懇親会

11月28日(火)10:00～11:30 自由論題研究発表4件

11:30～12:40 昼休み

12:40～13:10 基調講演

13:20～14:50 統一論題（温泉資源の保護と適正利用）研究発表4件

交通案内：鹿児島空港および日豊本線霧島神宮駅から霧島ホテルまで、バスで約30分  
日本温泉地域学会第8回研究発表大会の開催に際して、受入温泉地の妙見温泉観光協会では、下記のメールアドレスで情報を発信していますので、ご覧ください。

<http://www.myoken-onsen.com/8th-RSA>

## 研究発表大会プログラム

11月28日（火）

**自由論題** 発表時間：20分（発表15分、質疑5分）

座長：山田 等（聖徳大）・布山裕一（日本温泉協会）

10:00～10:20 大山琢央（別府大大学院）：資料から見る近代の熊本県山鹿温泉の諸相

10:20～10:40 于航（千葉大大学院）：中国遼寧省安波温泉の開発と現状

10:40～10:50 休憩

10:50～11:10 ハーヴィ・シャピロ（大阪芸術大）：全国温泉地防災実態調査 その1

11:10～11:30 長島秀行（東京理科大）濱田眞之（地熱）：浴槽における温泉水の簡易測定

11:30～12:40 昼休み（常務理事会）

**基調講演**

12:40～13:10 只野公康（妙見温泉観光協会会長）：霧島温泉郷の現状と将来

**統一論題** 温泉資源の保護と適正利用 発表時間20分（発表15分、質疑5分）

座長：浦 達雄（大阪観光大）・濱田眞之（地熱）

13:20～13:40 野田徹郎（日鉄鉱コンサルタント）：温泉・地熱系としての資源の見方

13:40～14:00 山村順次（城西国際大）：温泉資源の観光的利用—山形県と千葉県—

14:00～14:10 休憩

14:10～14:30 石川理夫（温泉評論家）：温泉資源保護をめぐる各都道府県の取り組みの現状と考察

14:30～14:50 布山裕一（日本温泉協会）：温泉資源保護に関する法律問題—群馬県における訴訟をめぐる—

- 日本温泉地域学会第7回研究発表大会・総会は、5月28日（日）・29日（月）の両日、静岡県伊豆の国市伊豆長岡温泉で開催されました。伊豆の国観光協会・伊豆の国市の多大のご尽力のもとに、視察会・懇親会・研究発表会が行われ、伊豆の国市長を交えたシンポジウム「温泉と健康のための地域づくり」では、地元民も多くて約80名もの参加者があり、活発な意見交換がなされました。シンポジウムの詳細は、本誌記事をご覧ください。
- 日本温泉地域学会第9回研究発表大会・総会は、平成19年7月初旬に山形県蔵王温泉で開催される予定です。詳細は温泉地域研究第8号に掲載します。

# 日本温泉地域学会入会申込書

平成 年 月 日

会員種別	一般	学生	賛助 ( ) 口
ふりがな 氏 名	印 (満 歳) 男・女		
団体名・商号 代 表 者 名	印		
勤務・所属先名称			
所 在 地	〒		
	電話	( )	
	FAX	( )	
	E-mail :		
現 住 所	〒		
	電話	( )	
	FAX	( )	
	E-mail :		
研究・関心分野			
メールでの対応	可能	不可能	
研究会誌送付先	勤務・所属先	現住所	

\* 学生会員は学生証の写しを同封してください。

事務局受付日： 年 月 日

申込書送付先

〒 299-2862 千葉県鴨川市太海 1717

城西国際大学観光学部山村研究室内

日本温泉地域学会事務局

電話：04 (7098) 2839

FAX：04 (7098) 2805

郵便振替：口座番号 00190-6-462149 加入者名：日本温泉地域学会

## 日本温泉地域学会役員

- 会 長 山村 順次 (城西国際大学)  
副 会 長 石川 理夫 (温泉評論家)  
理 事 長 濱田 眞之 (地熱)  
常務理事 長島 秀行 (東京理科大学)  
" 辻内和七郎 (箱根温泉供給)  
理 事 池永 正人 (長崎国際大学) 市原 実 (山梨県立大学)  
浦 達雄 (大阪観光大学) 甘露寺泰雄 (中央温泉研究所)  
菊地 莊悦 (東鳴子温泉まるみや) 小林 浩 (千葉県庁)  
首藤 勝次 (長湯温泉大丸旅館) 只野 公康 (妙見温泉どさんこ)  
中澤 敬 (草津町長) 布山 裕一 (日本温泉協会)  
古田 靖志 (岐阜市島中学校) 松崎 郁洋 (黒川温泉ふもと旅館)  
森 繁哉 (東北芸術工科大学) 八岩まどか (温泉評論家)  
由佐 悠紀 (京都大学)  
監 事 中山 昭則 (別府大学) 谷口 清和 (あおもり温泉地活性化研究会)  
幹 事 君島 俊克 (佼成学園) 小堀 貴亮 (駿台トラベルホテル専門学校)  
任期 : 2006 (平成18) 年5月29日 ~ 2009 (平成21) 年春季大会

### 温泉地域研究 第7号

2006年9月30日発行

編集・発行者 日本温泉地域学会

〒299-2862 千葉県鴨川市太海1717  
城西国際大学観光学部山村研究室内

電話 04 (7098) 2839

FAX 04 (7098) 2805

振替 00190-6-462149

印刷所 株式会社 こくぼ

〒260-0843

千葉市中央区末広3-3-10

# Journal of Studies on Spa Region

No.7  
2006.9

## contents

### Articles

- The Pitfalls of Professor Matsuda's Patchy Remarks on Onsen  
(Hot Springs) and Hot Spring Cure Culturism ..... Michio ISHIKAWA (1)

### Research Notes

- Possibility of Shiobara Spas as a Health Spa Resort  
..... Isamu MAEDA Sook-young KANG (15)  
Regional Changes of Spas in Kamakura City ..... Kazuko SHINDO (21)

### Symposium

- Formation of Spa Region for Health ..... (27)

### Materials on Spa

- Redevelopment in Kannawa Spa and Renewal of Vapor Bath  
..... Tadayuki KONO Akinori NAKAYAMA (43)  
Lindner Alpentherme in Leukerbad, Switzerland ..... Masahito IKENAGA (45)

### Book Reviews

- Michio ISHIKAWA 『Pilgrimage to Holy Springs』 ..... Hideyuki NAGASHIMA (47)  
Junji YAMAMURA 『Papers on Spas written by Junji YAMAMURA』  
..... Tatsuo URA (48)

- Notes and News ..... (49)